女鑑

明治廿七年十一月三十日發行

第七十五號

東京 國光社

女鑑第七十五號目次

烈婦可留子



女鑑 第七十五號

女鑑

風霜の苦

夙に起き、夜に寢ねて、田野の間に奔走し、寒風に梳り、繁霜を履み、勤苦勞働ずるものは、農家の男女なり。晝夜を分たず、野營に出入し、究北沍寒の敵地に在りて、乾糧を嘗め、冷水を飲み、刻苦艱難するものは、出征の將士なり。農家の苦は、年々渝らず。將士の苦は、時に或は是あり。されど、將士の苦は、唯、風霜に止まらず。硝烟野に漲り、彈雨空を掩ふの間に徘徊するの最大苦難あり。即、農家の艱苦に勝ること數等なりと謂ふべきのみ。

斯く、各、等差ありと雖、其の風霜の苦を嘗むるは、固より、同じきなり。吾人

が、常に、文筆を操りて、机卓の間に坐臥するとは、實に、同日に談ずべからざるものあり。優閒なること、吾人の如きにして、尚、飽くなきの希望を抱き、以て、世に求めんことを謀るは、抑、亦、愧づべきの至ならずや。今日、彼の風雨霜露の艱苦を思はゞ、其の欲念や、抑ふべきなり。其の希望や絶つべきなり。

願ふは、諸孃も、亦、必、吾人と、其の感を同うせらるゝならん。果して然らば、諸孃が、心中の所望、所欲も、抑へて、敢て、發せざるを得べけんか。あはれ、諸孃、朝夕事なく、飽まで食み、暖に衣て、出づるには車馬あり、從僕あり。入るには、煖爐あり。屛帷あり。其の身を保護する所以のものは、備はらざる所なきなり。農家の寒苦と、將士の困難とを思ひ比べなば、はた、如何に。假令、其の心

には慊らずとも、其の意には滿たずとも、之を耐へ忍ばんこそ、何の難きことかあらんや。情に於いても、義に於いても、斯る注意は、固より、必、無かるべからざることとなればなり。

抑、人の苦艱を思ひて、我が身を愼むは、誠に善きことなり。されど、たゞ、其の欲望を抑ふるのみに止らずして、彼の勞苦に當るに足るべき務と成さば、最、善を盡くすと謂ふべきなり。あゝ、人の勞苦を我が身に體し、人の艱難を我が事に比して、他の老幼寡孤のものを救恤するは、誠に、慈愛至善の情の忍ぶ能はざる所より出づるものにして、能く、之を行ふものは、即、仁人と謂ふべきなり。

嗚呼、君王の恩は天より高し、父母の恩は地より厚し、人々、之が恩德に報いんとせば、如何なる雨雪も、風霜も、物の數かは。況して、彼の國家の財本を作ら

ん爲に勞苦する農家と、國家の光威を張らん爲に艱難する將士との勞を思はゞ、何を爲してか勞苦ならんや、何を爲してか艱難なるべきかは。

論説

德川時代女子敎育史評論（十）

岡崎遠光

二、同時代女子敎育の要概（下の六）

古の商業社會は、工匠社會に比して、多少敎育の行屆きたりしやう思はる。是れ、或は、富有なる者の、前者に多かりし故とも考へらるれど、實は、家庭敎育の然らしめし所ならむ。而して、其の家庭敎育とは、商人は、其の父兄、多くは、我が家に居り、其の子や、妹を管督指導せしもの、是れなり。工匠の業に從事する

人は、朝早くより、出でゝ、日暮にならねば、家に歸る事稀なるも、商業家は少しく、之に反して、却りて、我が家に居らぬ事稀なり。長上の家に在りて、家事を管督指導すると、在らずして、放擲するとは、其の下に立つ者に取りては、後來の言行上、大なる差違なくむばあらず。別きて、幕府時代に於いては、眞正の學校といふものなく、家庭教育、その重なるものたりし故に、其の長上の多く家に在る商家と、在らぬ工人とは、教育上に就きて、便不便の度、推して知るべし。固より、商家には、比較上餘裕ある者多き故、比較上、女子躾方に注意すべき有様なるは、其の家の女子に取りて、幸福、こよなき事にはあれど、其の家、富有なるがゆゑに、其の家の女子に、教育ありとは、斷言せられず。之を、古書に徵するに、『遺文集覽』に、譽を殘せる、遊女大橋の如きは、本、甚、貧しき一平

民の女なり。然れども、其の歌と、文とは、末代までも、我が文學史上に、燦然たる光を放つべし。此の如き女、富裕家にありしや。聞かまほし。又、『庚子道之記』をものせし白拍子武女といへるは、東都一小賈の女なりしが、歌といひ、文といひ、將、詩といひ、何れも、當代の名家、清水濱臣、橘千蔭等の賛評を得て、遺稿、今、尚、學者の一顧を煩すもの、實に、希有の事にて、今日の大家巨商の娘達には、或は、此の文のこゝろをさへ、解き難かるべし。尚、古の豪家の女子は、琴、三味線を、第一の修業と心得居りしを以て、文字上より得可き知識、及び、經驗上より得可き知識は、却りて、中以下の女子に、收獲せられしやにも思はる。予は、今、左に、中村、貝原、高井諸先生の敎育主義が、如何に、商家の女子の倫理的觀念を、支配せしかの一實例を掲げむ。

古の花の都の西京、町は三條とて、人の家の煙繁き中に、河内屋といひける商人ありけり。そが家の娘は、名をゐつといひ、稚き時より、處の華奢を厭ひ、敎訓書の敎ふるまに〳〵、女子の藝を學び、針仕事は、まだ、二八にならぬ前に、一人前の事に差支へなく、古書にさへ、眼をさらしければ、向の家、隣の人は、女子の手本なりといひはやし、皆人、その兩親の、良き玉設けたるを羨み合へり。されば、兩親も、磨けよ、光れよとて、父は、餘りもあらぬ資本の中より、娘の讀みたしといふ書籍を買ひ與へ、母は、己が飮食を減らしても、何卒、娘の立身をと、神々に禱りぬ。天禀の美質は、磨かねど、光あるに、まして、兩親に磨かれし、ゐつ子の事なれば、二八の冬籠過ぎて、十あまり七とせの春は、笑み綻びたる梅の香も、此の娘の譽には、少し劣りしなるべし。鴨川の淸き涯に洗は

れし、姿のよしあしは、いはずもがな。手折らばやとて、文寄する人は、濱の眞砂子のさはありしが、ゐつ子は、皆、答ふるに、男の道、女の心得など、古、今、賢き人の言と行とを示しければ、世の人は、いやましに、褒め稱へて、はては、月卿雲客の口にさへ、上ることゝはなりぬ。

あはれ、落花流水、處定めぬ事とは、兼て聞きつるが、何處、如何なる惡魔の祟りかありけむ。父と母とを、二とせの間に奪ひ去りて、其の子をば、寄邊なぎさの捨小舟となしければ、ゐつ子は、日はひねもす、夜はよもすがらの泣き悲みに、さすがの花顔も、空しく萎れて、朝な、夕な、鴨川の水の、もとの如く流るるを怨ずる身の上とぞなりにける。

かくて、ゐつ子は、己が生れ、己が譽を得、己が親の骨を葬り、己が久しく住み

馴れ、尙、己が身をも、此の地にて終らむと心懸けぬる故郷にも、住み難うなりて、遠寺の鐘の音、無常を告ぐる曉、叡山のそよ吹く風に送られて、難波江指して出で行けり。其の後、此の地なる、親戚に養はれて、七とせの間、一日とても、故郷の空を眺めぬ事なくて、暮しけるに、貞節の花は、亦、處定めず、咲きにほひて、親戚の名さへあげければ、其の家の人々は、我がはらからの情もて、いと愛でつゝありし程に、關東の武士、其の行を慕ひ、請ひて、己が妻となしぬ。ゑつ子は、妻となりてより、夫を天とし尊び、己は、地となりて事へ、一家の波風、いと穩に暮しけるに、兒一人生みし後、間もなく、夫の津田某は、國の爲、君の爲なりとて、兩刀を腰に横へて、旅路に出でしまゝ、終に、歸り來らぬ人となりぬ。時に、ゑつ子の年は、三十に足らぬ二つなれば、他人は、いと氣の毒におも

ひて、心の底、いかに、と、探ぐるに、鐵の流れむ時あるも、其の操は正しかるべく、中々に、肯ふやうすも見えざれば、默して止みけりとかや。

亡夫の愛でにし庭の八重櫻咲くにつけても袖しぼりつゝ

此の詠歌を讀まむもの、心を平にし、氣を靜にし、人定りて後、三誦せば、一片の同情、眼中を濕すことなからむやは。

これ、予が、或老人より聞き得たる事實にして、修身上の一美談なり。ゑつ子が、周圍の華奢に染まざりし事、敎訓書の敎を守りし事、技藝讀書を好みし事、能く長上に事へし事等は、一小賈の娘としては、實に感服おく能はざることにあらずや。殊に、夫の、戰場に尸骸を曝しゝ後、堅く、操を守りて、亡夫のめでにし兒を養育せしは、今日此の頃の良鑑にこそ。

女子處世論（十三）

三輪田眞佐子

第十一　忍耐

長閑なる春の山邊に、咲き香ふ花をば、誰か愛でざらむ。清涼なる秋の川邊に、照り渡る月をば、誰か賞めざらむ。されど、その花や、決して憂苦を知らざりしものにはあらず。霜朝には、その葉を奪はれ、雪夜には、その枝を折らるゝなど、千種の苦難を堪へ忍びて後にこそ、かくめでたき春陽に逢うて、咲き出づるなれ。亦、その月とて、常に、かく玲瓏たるものにはあらず。沈隱その光を遮る煩累を忍びに忍びてのちにぞ、かく晃明なる。あはれ、人、かゝる、天地の自然的教示とも言ふべき光景を悟らむには、もはや、忍耐の處世に欠くべからざる理は、他人の教訓を待たで知り得べし。

わきて、女子は、その天職忍耐を要すること多し。若、女子に忍耐の德なかりせば、いかで、老い果てゝ耳も聞えず眼も視えぬ父母、あるは、舅姑の徒然なるまゝに、往時を慕ひ現在を悲み、春來れば忽いはん。われ、猶、わかゝりせば、いでゆいて吉野の櫻花を見むものを。秋來れば忽いはん。われまゝなりせば、いでて雲井の杜鵑を聞かんものをなど、理ならぬ不平をならす心を、やすんじ得ん。亦、良人たるもの、その、力山を拔き、その氣、世を蓋ふ如き性質の英傑ならむには、たまく小謹を顧ざることもあらむ。これに反し、平凡ならむには、事々物々身ませまりて、遺憾と思ふこともあらむ。將、君子人ならんか、そが妻たるもの、才德秀づるものにあらざる限りは、叱咤譴責を受くること虛日なかるべし。その他、内はあめつちもわかぬ赤子を育て、東西も知らぬやうなる婢僕を御

して、家政を治め、外は「いろ見えで移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける」と、小町が詠ぜし如き人情の人と交りつゝ、世の濁流に同化されざるは更なり。進みは、女子は徳風の淵源なり、との高尚なる志を懐き、之を實踐すべきなど、婦女の行ふべき百の天職、悉く忍耐を要せざるもなからんかし。

そも／＼、忍耐はかくばかり人生に必要なればにや、口にもおほく／＼言ひ、文にもおほく／＼見ゆるをもて、諸孃の中には、こは既に陳腐せる言語なり。吾等、族に、小學校の修身科にて、その二字を學びきと、冷澹に看過するものあらむ。されど、おのれが望むところは、忍耐の字義にあらで、忍耐の實行にぞある。おのれは、いまだ、世の婦女が、擧りて忍耐の德ありとは信ぜず。如何となれば、將に沒せんとする夕陽に比ぶべき餘命を恃まんとする老者を、うるさしと思ふ

無情の女子、あるは、出でゝ難累に心を傷め、その欝憂やるせなく、入りて、たまたま、哀訴的に顔色を亂す、あはれむべき良人を慰めて、反て、いまはしきと思ふ婦人さへ、ありと聞けばなり。況して、忍耐の力なくして、子に不慈のもの、人に不實のものは數ふべからず。尙、女子の通癖なる、多言は沈默を守り、嫉妬は寛大に安ずるに忍びざるものなり。淫奔は私情を制し、背德は邪行を禁ずるに堪へざるものなり。蓋、女子立世上の成効及び失敗は、一切忍耐力の強弱に由るめり。豈、忽に考ふべけむや。

潮に滿干あり。時に寒暖ある如く、天地の萬象循環して止むことなし。などか、獨、人生の運命に循環なかるべき。さて、聖人君子は毫も意に止めざらんも、凡人の最、恐るゝ所は貧苦の運命ならん。されど、忍耐して勉勵せば、必や、富貴

の運命に遭はん。むかし、朱買臣となん言ひける人は、博學の士なりけれど、一時貧苦の不幸に陷りき。されはその妻住みわびて、いとまを乞ひけるに、買臣それをも、なほ、戀々と慕ひけむ。今一年を待てと語りしに、輕薄にも聞入れで棄て去りけりとぞ。もし、眞の貞婦たらむには、共に艱難を忍耐して、遂に安樂の域に達すべかりけるものを、あはれ、かの女、その報にや、翌年、買臣錦衣を着て、ふる鄕なる會稽の大守になりて赴けるとき、かの女はその時、その治下なる賤民の妻となり居り、買臣に見えにけるを耻ぢて悲み、消え入りきとかや。且、孟母も忍耐の心なくんは、いかで三遷を厭はで兒を育て得む。中將姬も忍耐の德なかりせは、必、雪中に立ちて鉄腸の花と芳を爭ひ得ざりけん。

要するに、忍耐は人生成業の基なるらん。げに、女子の境界は、人こそ知らざれど

時々刻々老少の隔なく自、袂をうるはすこと多からむ。されど、之を忍耐せば、安樂の日も亦來るべし。敢て問ふ。舟筏なくして誰か能く海を渡る。忍耐なくして誰か能く世を渡る。うべなり。書曰必有忍其乃有濟

史談

烈婦可留子

大町桂月

女は已を愛づる者の爲に粧ひ、士は已を知る者の爲に死ぬと云ふ。されど、女といへども、いたづらに、容貌のみを飾るべきにあらず。節に臨みては、また、一身をなげうちて、己を愛づる人に酬ゆべきなり。可留子は、やがて、その節に死したる美人にして、赤穗四十七士の驥尾に附して、芳名、千載に傳ふるに足れり。史談紙上、姫君たちよ見ゆべき價ある烈女なれど、玆に、紹介の勞を執らむ。

かの赤穗四十七士の張本たる大石良雄、未だ主君の仇を報ずるの期を得ずして、京都の山科に閑居せるほど、關東の偵察、いときびしかりければ、わざと、身を放蕩にもちくづして、人の耳目をさけたり。されど、關東にては、此由をきゝ、淺野氏の老臣ともいはるゝ身なるに、かく、酒と色とに耽りたれば、復讐などは、思もよらざるべしとて、心を安んじて、偵察を怠りければ、良雄等、爲に謀を運らすの機を得て、一擧して、讐を復するに至れり、古より、讐を復する者は、身をやつして、薪に臥し、膽を嘗むるが常なるに、良雄は全く之に反して、青樓に流連して、處爲、人の意表に出たり。若し、良雄にして、かゝる、苦肉の策を行はずして、一意に、仇を討たんとせば、敵、ます〳〵備を嚴しくして、到底、其意を達することを得ざりしならむ。されば、かく、主君の爲に、一時、青樓薄倖の名を取りしは、良雄の思慮の人にすぐれし所以にして、島原の茶屋の樓上、絃歌涌き、舞袖翻る處に、悲歌痛飲すること、よそ目には嬉しく見ゆれど、良雄の心中には、針の席に座はるよりも猶苦しき思ありしなるべし。良雄は實に、敵の嫌疑をさけん爲に、酒色に耽りたり。關東の方にて、これを苦肉の計を察せざるのみならず、良雄の親族といへども、

眞に、君の仇を忘れて、放蕩に流れたる者とのみ思ひ込みて、憂慮一方ならざりけり。中にも、良雄の叔父なる小山良師といふ人、いたく心配して、その放蕩を止むるてだてを案じけるに、其妻云ひけるは、良雄ぬしが、かく、内を外にして、島原三界にうかれ行かるゝことは、畢竟、閨房の寂しきに依りてならむ。いま、島原の茶屋女にも劣らぬ美人を迎へて、手活の花と眺めしめんには、放蕩も、おのづから止みぬべしと云へど、小山も、さなりと同意して、京都二條橋の西に、可留子とて、町人の娘ありけるを、金もてあがなひて、良雄の許に送りたり。

美人を送りこされて、良雄は、いたく驚きたれど、もはや、いなむに由なけれど、叔父のすゝむるまゝに、可留子を迎へて、箕帚を執らしめけるに、可留子は、其形のうるはしきのみにはあらで、其心もいとゞうるはしく、町人の娘なれど、作法ども、をさ／＼武家の娘に恥ぢず、殊に琴に巧なりけれど、良雄も憎からず思ひて、胸ふたがるをり／＼、その琴の音を聞きて、心をぞ慰めける、良雄は固より色を好む心はなきに、とても世にながらふべくもあらぬ身なれど、假の契は結ぶべくもあらねど、さすがに、非情の木石にはあらず、春を待たぬ身にも、なほ、年の暮は惜まれ

けむ。可留子の色にあらず、可留子の姿にあらず、唯、可留子のまめやかなる心には、良雄の鐵石の腸も爲に斷たれたり。始は、唯、うるさく思ひしを、その心ぞへの殊勝なるにめでゝ、牡鹿の角のつかの間を命にて、はかなき契をぞ結びける。主の仇を復せむとする良雄の一心は、酒に依りて變せず、色に依りて動かず、可憐なる可留子の心ぞへに依りても移らず、人知れず苦心して、敵の樣子をさぐりけるほどに、遂に時至り、謀熟して、元祿十五年といふ年の神無月、降りみ、ふらずみ、定なき時雨の空に、心の恨を寄せて、同志の士と共に、ひそかに立出でゝ、鳥がなく、東に下ることゝはなりぬ。その發足の前夜、良雄は、心ばかりの離別の宴を開きて、頻に杯を傾けゝるが、ゑぞらくして、杯を可留子に屬していひけるは、年頃、浪人の身となりて、一文だに得る處なければ、坐して食へば、山も亦空しといふ世の諺に洩れず、今はたくはへも盡きて、一家の生計を支ふるに由なし。これよりは、當地を去りて東に下り、好き主を取りて俸祿を得んと思ふに、一まづ、御身に暇を取らするなり。若し、運拙くして、一生浪人にて終らむ、致し方もなかるべけれど、幸にして立身することを得ば、また、御身を迎ふることもあらむ。されど、それは、た

しかならぬことなれば、今までの契を、一場の夢と思ひあきらめて、相應しき縁あらむ、何處なりとも、身を任せて、一生を安く送るべしといへど、可留子、杯をいたゞきて姿を改め、ふつゝかなる妾にはあれど、久しく事へまつりて、君の御心は精しく知り侍りぬ。そも、君は食祿の爲に二君に事ふるが如き、きたなき心をもたせ給へる人にはあらず。此度の御旅立は必、深き故ありてならむ。されど、女は、すべて、つゝしみなきものなれば、もし洩らす事もやあらむと氣遣ひて、妾には隱し給へるにや、年頃、御情を受けし甲斐には、せめて、御所存のほどを伺ひて、心をやすめたく思ふに、妾をも口善惡なきものとおぼし給ひてか。弓矢八幡も照覽あれ、あだし心はなきものをといふ。良雄、聞きて、其志に感じたりといへども、謀の洩れん事を恐れて、實をつげず、なほ、いつはりていひけるは、年頃契りかはしたる御身に何をか隱すべき、武士の意氣地も衣食足りての上の事。腹空しくしては、さすがに、高楊枝もつかはれず。首陽山に薇を採りて祿でもなき瘦我慢をせんよりは、早く五斗米の爲に腰を曲げて、子孫長久の謀をなすには如かじ。成ると、成らざるとは、運次第なれども、此度は、人の最、多く集る江戸に行きて、相應しき主取

らんと思ふなり。それより外には思ふことなし。云はゞ、出世の門出なれば、かみたに打解けて、こゝろよく酒を飲み、しばしの名殘に、御身の琴を聞かむ、また、御身の歌をも聞かむ。まづ、我彈く琴の音を聞きねとて、側なる琴を把て、自かなでたり。その一曲闋るを待ちて、可留子の云ひけるは、日頃かなで給ふには似ずして、今夜の琴は、音節いと亂れたり。これ、全く君の御心に大慮ある故にこそ。如何にかくさせ給ふとも、琴の音色にあらはれぬ。かくても、猶、妾を疑ひて、つゝみ給ふか。あな、つれなき君の心やとて、翠の袖もて顏をおほひて、よゝとばかりに泣き伏したり。

その明察といひ、その日頃の氣慨といひ、可留子は、決して、世の常の女の比にあらざるに、其心いと切なれば、良雄も、今は、つゝむに包まれず、主君の仇を討たむとする由を語りければ、可留子、いたう喜び、うれしや、妾の心はじめて落付きぬ。これまで、君侯の仇を討たんと志し給はで、空しく月日を送られしは、怪しきことの限なり。されど、智勇、人に過ぐれ給へる君にしあれば、君侯の仇を忘れて、一身の安逸のみを圖らるゝことはあらじと思へど、君は日頃さる景色は少しも見せ

給はざれど、心また惑ひ、とやかくと思ひつゞけ、心中の謎、とく由もなくて、常に思ひ悩みけるに、此度の御旅立を見て、扨は、愈、復讐の途に上らるゝならむとは思ふものから、たしかに其れと知りたき女氣の一徹に、くどくも問ひ奉りたる罪は、許し給ひてよ。かくと、知り侍りし上は、最早思ひ殘すこともあらず。さらば、東に下りて、首尾よく仇を討たせ給へ。御名殘は盡きねど、私の小事には代へ難き公の大事の御首途、再び御目にかゝらん事もおぼつかなければ、せめて、心を込めて、秘曲をかなでゝ。はなむけにかへ奉らむとて、かなではじめぬ。峯の松風や通ひけむ、妙なる調に、空ゆく雲もとゞまり、清く澄みたる聲に、梁の塵も躍るとかり、燈影くらくして、虞姫の涙はなきも、えかすがに、夜深くして、楚歌の思ひとぞ切なるべし。

夜、一夜あけぬ。良雄は、つとめて、起きいでゝ、朝食を終へ、旅の用意を調へて、はや、立出でんとするに、可留子の姿見えず、良雄をはじめ、一同、いとあやしみて、さがしけるに、憐れや、可留子は、二階の一間よ自害して、息已に絕えてけり。こは何故の自害ぞと、人々あきれにあきれてあ[illegible]ける が、今更、せんすべなければ、

人をつかはして、可留子の父をよびよせぬ。父も其亡骸を見て、いたく驚きたれど、さはど悲める樣は見えず、しづかに、良雄に向ひて、死ぬるまでには、深き子細なくてはかなはず、思ひわたり給ふ事どもあらバ、告げ給へといふ。別に思ひわたることなし。唯、此度の離別を悲しむあまり、心狂ひて死たるにやあらむと云へど、老爺、首をうちふり、いや〳〵、子を知るもの親にしかずとやら。娘の自慢をするにはあらねど、娘の平生の氣象を察するに、かゝる事にて心を狂す如き小膽の女にはあらず。必外に仔細あるべし。頑固一徹に世を渡りし此老爺、決して他に洩すまじけれど、御腹藏なく、しらせ給へと、切に乞うて止まざる言語のはしに、心の誠あらはれて、いとたのもしく思はれけれど、良雄は心を決して、人なき處に呼びよせ、昨夜復讐の企を告げたる顚末を物語りて、さていふやう、復讐の事は深く秘して、親族にも告げざりしに、可留子の心のけなげなるにめでゝ、つゝむに由なくして洩らしけるなり。さるに、女は言葉多きもの、つゝしみなきものなれど、古來、大事の謀を妻妾に洩して、事を取りたる例、いと多し。されど、可留子は我をして後安く思はしめんとて、自害したるものならむ。あくまでも健氣にして思慮深き女かな

といへど、老爺は、掌を打て、よろこび勇み、あつぱれ、君は誠烈なる大丈夫かな。その忠義の御心は、古の楠公とやらに劣るべうも思はれず。かゝる英雄の情を受けたる我娘は果報者、仕合者。いづれ、一度は死ぬる命、君の爲にさゝげたるは、下郎の娘には死甲斐ある次第、老いさらばひし此爺までも、いとゞ喜しく思ひ侍るなり。君は一刻もおくれさせ給ひてはあしかりなん。はや〳〵立たせ給へ。後の事は、此老爺がよきに計らふべければ、よろづ、後やすくおぼしめせとて、涙一滴もこぼさぬ健氣さに、良雄は、感涙をしぼりもあへず、そこばくの金をとらせて、たちいでけりとぞ。

此の翁が、年老いて、最愛の娘に死別れたる心の中は、如何にかなしかりけむ。されど、娘の死、その處を得たるを以て、翁は、一滴の涙もそゝがざりけり。その義に勇む心は、賞歎するにあまりあり。可留子の心に至ては、更に悲壯可憐にして、千載の下、凜として猶は生氣あるを覺ゆ。いさぎよく散りてこそ、櫻は人に惜まるれ。可留子の一死、無量の感慨をこめて、いさましくも、また、をゝしく、以て良雄の忠肝義膽に配するに足れり。げに、此父にして此娘ありとやいはむ。其平生の素養

もおしはかられて、いとゆかしきは、此親子の心根なり。

可留子の事跡は、彼の喜劍といふ烈士の事跡と共に、男女好一對の美談といふべし。喜劍は薩摩國の人にして。慷慨悲歌の士あり。元祿年中、天下を周遊して、京都に至り、大石良雄が仇討の用意をなさずして、唯、酒色に耽るを見て、いとゞ齒搔く思ひ、茶屋によびよせて、さま〳〵に罵り、はては、汝等の如き畜生侍に杯をとらすも、けがらはし。これを食へとて、足の指に、刺身をのせ、立ちはだかりて、良雄に食はするなど、罵詈狼藉、ほと〳〵言語にたえたり。その後、良雄が四十七士の魁首となりて、首尾よく仇を討ちしをきゝて、後悔措く能はず、せめては、申譯にとて、四十七士の墓側にて自殺しけり。されど、其死を潔くせしことは、喜劍、可留子共に相似たり。喜劍が良雄を罵りし心根も、可留子が良雄の所存を聞きて、始めて落付きし心根も、亦、相似たれど、喜劍は良雄の本心を見拔くこと能はずして、罵詈を逞しうせり。しかるに、可留子の慧眼は、早くも、良雄の常人にあらざるを知り、琴の音色によりて、其大望を知るなど、人を見るの明は、遙に喜劍にまさりて、世にありがたき烈婦といふべきなり。

可留子は、かゝる烈婦なれども、忠臣藏などには、淫奔にして親を思はざる女のやうに、作りかへられたり。今日、目に一丁字なき市井の匹夫匹婦すら、四十七士の事跡を知りて、其忠義を稱賛して措かざるものは、忠臣藏の功、多きに居れり。四十七士の忠義は、實に忠臣藏に依て、俚耳に入れり。されど、可留子は、折角の烈婦も、忠臣藏に採用せられて、反て淫女となれり。可留子の地下の靈にして知ることあらば、竹田出雲等の識なきを一笑するなるべし。

可留子の情人として、忠臣藏に採用せられたる早野勘平も、亦、あしさまに作りかへられたり。早野勘平とは、萱野三平の替名にして、三平の家は、世々大島侯に仕へけり。三平は重利の次男なるが、主公、大島羽州の薦によりて、淺野侯に事へぬ。長矩の變、其報をもたらして赤穗に至り、義士と共に、復讐の事を誓ひて、一先、其家にかへりけるに、父は早くも、其復讐の擧に與せんことをはかり知り、かくては、其主侯をも連累せんとて、家にとゞめて、また出さず。かゝれど、家にとゞまれば、義士に負き、家を出づれば父に負く、進退これきはまりて、遂に自害してはてけり。されば、三平は、四十七士と共に仇を討つことを得ざりきといへども、其忠義の心

に至ては、四十七士に劣るべくもあらず、其境遇は、四十七士よりも更に悲壯にして、可留子とは關係なきのみならず、うきたる心は露なき烈丈夫なり。されど、三平、可留子の實傳よりは、忠臣藏の艶說、世に流布して、世人、往々、其眞相を誤るものなきにあらねば、かくは、くど〳〵しうものしつるになむ。

大内義隆の室貞子

秋里豊成

天文の頃、山陽九州に威を振ひて、餘れる勢、支那朝鮮までも及ばせる、周防の太守大内左京大夫義隆が室貞子は、萬里小路内大臣秀房卿の女にて、心やさしき人なりけり。義隆に一人の思ひものありて深く愛寵みあへり。一とせ義隆都に上ることありて、久しく歸らざりければ、貞子使もて、かの思ひものゝ女房が許へ小袖やうの物、其他何くれと色々とり揃へておくり文こま〴〵とかき添へて言ひけるやう、殿の久々の在京にて、そなたも嘸かし待ちわび給ふらん事、いづかたも同じくこそと書きて、奥に、

身をつみて人のいたさぞ知られける戀しかりけり戀しかるらん

かく讀み添へて遣しけれど、かの女房見て痛く感じて、常々貞子の許へまゐきて敬ひ仕へけり。貞子益々厚くして情深くあつかひければ、女房涙を流して人にいひけるは、やがて殿の御歸りありて再び情をかけ給ふ事ありとも、斯る情深く有がたき御人の上思へば、身の冥加も恐ろしければ尼にならむと申しけるぞ、貞子聞きて、中々さる事のありては、殿の御かへりの後、わが身の咎こそ重かるべけれ。亦わが妬き心より斯くありしなど言はれんもうしろめたしとて、押し止めて其儘に召し使ひいたはれりしとなん。あはれ女に免れがたき病は嫉妬の心にて、唐土の聖人たちも七去のうちに數へ、ある人は、何の取る處なき女も嫉妬なきは捨てずといへる程なるに、貞子が、心やさしく情深きが上に、嫉妬なきは、美はしとも、めでたしとも、尊しとも賞るに言葉なからまし　人の妻たるもの皆貞子にならひなば、冀くど過なからむか。

漫録

根なし草（二）

女のやうふく

やう服といふ衣きたる女の書にかきたるを見るに、白き腕よわ肩などあらはに出せり。こは夜會とかに用うるものなりと聞く。近き頃は、み國の女にも、かゝるさますする者多きよしなり。膚を人の前に露すは、み國の風として無禮なる事にいひなし來りたるに、況して、愼み深き女のかゝる樣するは、いかなる故にか、いと淺まし。左傳といふ漢文に、服不衷身災也といふことあり。おのれ、或年の春、花見びとて小金井に物しけるに、例の洋服といふもの着たるやごとなき貴婦人の、車を從がへ、手鞄をうなゐに持せて寛に歩くを見たり。折しも、運動會とて若きをのこ共の群れゐけるが、この婦人を見かけて、手を拍ち聲をあげて、口々に毛唐人よ。洋妾よと罵りけれど、さすがの貴婦人も、面うち赧めて、いと困じたるさまなりき。これ左傳にいはゆる、服の衷しからざりしが故にかゝる辱うけたるなりけり。愼しむべきことにこそ。

自轉車にのる洋婦

西洋の婦人が馬にのれるを見て、ある人のいひけるは、彼らが馬にのるに、またがらで片のりするは、婦人のたしなみにて愼みふかきゆゑにこそ侍

れ。わが女のまたがるにくらべて、ゆかしく侍りといひけるに、おのれその折は、げにもと思ひき。さて此ごろ、彼の婦人が自轉車といふものに乘りて行くを見しに、さすがにたしなみよき彼らも、これには片のりのならぬものにや、跨がりて乘れり。いとをかしく覺えはべりき。女の馬にのるは、乘りかたのいかにかゝはらず、ゆかしきものならじ。自轉車にのるはまして。

靜の歌

鶴が岡八幡の拜殿とて、靜が舞し折、うたひし歌なりとて源平盛衰記に、

しづやしづ賤の苧だまきくりかへし
　昔を今にあすよしもがな
よしの山みねの白雪ふみわけて
　入りにし人のあとぞ戀ひしき

の二首をのせたり。世の人は、靜のよみ歌なりとして、もてはやせど、いと不審かし。前なるは古今集なる業平が歌に、伊勢物語にもいでたり

いにしへの賤の苧だまき繰りかへし
　昔を今になすよしもがな

とあるに、上の一句のことなるのみにて、亦次なるは、同じく古今集冬の部、壬生忠岑が歌に、

みよし野の山のしら雪ふみわけて
　入りにし人のおとづれもせぬ

とあるに意同じくて、詞のいさゝか異なれるのみなり。かつや、賤てふ冠辭に、しづやしづとつくるは、はなはだ謂れなき事にて、亦峯の白雪をふみ分て入るといふも、道理ならぬ事と覺ゆ。こは

静がよみ歌にはあらで、かの折におのが身の上にかなひたる古歌によせて、思ひを述べけるにてもありなむ。よも、今の世の歌よみの如く、剽窃などしけるにはあらじ。たゞ、その詞の誤りたるは、静があやまりて謡ひしか、あるは、作者のあやまりてかきしか、今はわきがたし。兎にもかくにも、静がよみ歌にはあらじとこそおぼゆれ。されど、かくいへばとて、伊勢物語なる、

風ふかば沖津しら浪立田山
よはにやきみがひとりゆくらむ

とあるは、萬葉集なる山邊御井が歌の

海の底沖津しら浪立田山
いつかこえなむ妹があたり見む

を、業平があやまりて、しるしけるにてもあらじ。

われぼれの姫君

いつのころにかありけむ。去る、なりあがりて時めける家の姫君、櫻の花のさかりを見んとて、侍女どもつれて上野の岡をそゞろあるき給ひけるに、侍女の一人が袖をひかへて、いかに、咲きも殘らず、ちりもそめぬ盛のけしきは、白雲にもまがひて、みごとにはおはさずや。姫君には一首よみ給ひてよとまをしけれど、姫君、さればよとて懷紙とうでゝ、さら〳〵とかきつけ給ふを見れど、

見わたせば柳さくらをこきませて
都ぞはるの錦なりける

とあるに侍女、まことにをかしくこそ侍れ。されど此のあたりには柳は見え侍らずと申しけれど、

姫君うしろをむき給ひて、わが腰のつきを見よやとのたまひきと。こは昔のことにて今の世の諸嬢にてはあらじ。

百人一首歌の解

今はむかし、なにがしといへる翁ありけり。なに事もしらぬといふを、いたくきらひて博士めく、えせ物しりなりけり。常に人を見れば文まうといひ、やじんとよびて、おのれひとりげなる振まひを、にくゝもをかしき事に思ひ、ぞめきて秋の夜ながのつれ〴〵慰めんとて、若きそのこども、或夜しも翁が家に集はれり。人々おきなをそゝのかして、とり〴〵に物きゝ興がりてあそびけり。翁たゞからかれたりともしらで、世界のことはかにかくと鼻うごめかして、したり顔にあらぬえせ言どもも語るを、かたはらいたしと聞きいたる一人が、つといでゝ、世に小倉百人首といふは、めでたき歌なるよしいひはやせれど、我らが下司には解せぬことぞおはき。翁はなに事にも博くおはせど、とき給ひてむやといへど、翁、さりけらしさりけらしと襟をたゞして扇ならしつ、おごそかなる咳二つ三つして、さて天智のみ歌は、秋の田のかり稲ぬすまれしをかこてる、持統のみ歌は、夏になりてまどしき家の、蚊やといふもののなきを歎けるなりなど、すゞろなる言どもいひもてゆきしが、業平朝臣の歌になりて、はたとつまりぬ。こはあまり人のいはぬ歌なればなるべし。やゝしまらくありて、翁やう〳〵あんじ出でゝいへるやう、こは昔立田川といふ相撲ありて、千早および神代

とい ふ遊女になじみなりけるが、立田川ゆゑありて、すまひのむれをおはれけるより、おちぶれて千早がもとに行きけるに、千早はおのが名にちなみて、いちはやく立田川のかひなきを見かぎりぬ。神代もまた、立田川をかへりみざりき。されバ、千早ふる神代もきかず立田川とはいふなり。さて立田川はかゝるさまにて、今は豆のからだに恵む人なきに、世をはかなみて、遂に水にいりてうせけるより、からくれなゐに水くゝるとぞいふなる。いかに人々、をぢが物ゑれるはかくこそと、いとはこりかなれど一人が、翁が物語によりて歌の心はげしぬ。されど、をはりの水くゝるとはの、とはといふは、いかなるゆゑか、事のついでに教へてよといふに、翁またも口つぐみぬ。やう／＼おちつきたるおもゝちにていへるやう、とはゝ千早の本名なり。

女智者遺聞　蒲城弘

女とて智略なきにあらず。その多く聞えぬは平常もちゐざれバなり。おのれ年ごろまさぐりたる文反古どものうちより拾ひ得たる女智者の物語かず／＼あり。今そがうちの一ッふたつを茲に掲げぬ。猶巻をおうてつぎ／＼に物せむ。

多賀谷家植の母智略の事

多賀谷家植豊田郡を治んとて、勢を二手に分け、行田宮内下栗常楽寺を攻めにけり。此城さのみ要害にもあらざれバ、只一時に攻め落さんと息を

もつかせず戰ひけり、去れ共城兵義を金石よりも堅く、命を惜まず切先より火を出し戰ひければ、士卒數多討れ、案に相違して下妻の城へ引退きぬ。爰に家植の母義表に出向ひ、軍の利あらざる事を聞て申されけるは、今敵兵疲て油斷してあらん早々引返して攻むべしと下知有ければ、家植并諸家中、女義ながら才智ありと感じけり。軍勢を催し取て返し、鬨聲を擧ければ、案の如く、敵の兵今は心安しとて、甲を脱ぎ鎧を捨置、馬の湯洗などして居けり。殊更今晝の合戰に草臥、其上敵をあへなく押散し、目出度候と、酒宴などして居る處へ寄手來りければ、防止るに手立なく、各々降參してぞ出たりける、（多賀谷記）

古田甚内後家亂心の僧をたばかりし事

古田甚内は美濃國郡上の人にて、武功これ有を、勝入公聞し召天正十一年御呼出知行百貫被下候處長久手にて討死、其子藤兵衛其節四歲なり、甚内後家は三左衛門樣に御奉公、武藏守御局に成ける、武藏樣未御幼少の節、淡路の城御門内に御遊び被成候時、持敎と申僧の弟子亂心し、俄に御城へ走り込、武藏樣を引抱て一間に取籠り申候故、大勢取卷候へども、あきれて致可樣も無之成り居申候處、甚内後家我等に任せられ候へ、何ともたばかり見可申とて、御小袖を持參して彼僧の側へ寄り、其御子を我等に少々渡し給へ、此小袖を召させ又進ずべしと申ければ、彼僧則武藏樣を渡しける故、御抱申て走り出て奪返したり。武藏樣御逝去の後、度々右の儀被仰出御歡にて

彼局事を御懇意御ひたはり被成、武蔵様御逝去後に尼に成榮壽と云。烈公の御時も鳥取御城中に被差置候て御懇意なり。寛永六年病死致しける。（藩史別錄）

をんな仁義物語下（二）

著者未詳

むかし、しゆんといひしせいしんのおやに、こそうといふ人あり。此人あくにんにて、わが子のしゆんをにくみ、あまつさへ、まゝはゝなをしゆんをにくむ、はらがはりのおとゝ、これもしゆんをにくむ、あるときおやのこそう、しゆんをころさんとて、くらをぬらせたり。しゆん心えて、かさを二つもちて、くらをぬりに、はしをさして上り給へり。こそうそのはしをとり、したより火をつけてやきころさんとす。しゆんかの二つのかさをもちて、とびおりてにげ給へり。又あるとき井のもとをはらせたり。よきほど、上よりつちをおろし、ころさんとたくみたり。しゆん心え給ひて、わきへぬけみちをほりて、つひにのがれたまふ。かゝるあくにんのおやに、よくかう〳〵をつくして、すこしもおやをうらむる心なく、たゞわがかう〳〵のたらざる事をかなしめり。年五十にいたるまで、おやをおさなき子のしたがふごとく、したひ給ひて、つひにおやのあくにんを、ぜんにんとなし給ひ、天かにかう〳〵の名をとり給ふ。いまの世にもおやあしきとて、かう〳〵ならぬとは申されまじきてはん也。およそかう〳〵は、わがそれ〳〵の

くらゐぶんざいはぜにやしなふべしとなり。ぶんにすぎてけつかうなるも、かうにあらず。又そさうなるもかうにあらず。しかるゆへに子たるものは、身上をしわけて、おやをもけつかうにやしなひ、おやのくらゐをめわぐるをかう／＼とす。又廿四かうにのりたるどうえい、わが身をうりておやのさうれいをしたるは、ふかうたるべしと、きんだいさたする也。又しんのけんかうの御子にしんせいと申人あり。まゝはゝのざんけんによりて、けんこうのつよくにくみ給へり。しんせいの臣んか申やう、おやでへよくいひわけをなされよ。さなくバたこくえ御はしりあれと申、しんせいおほせらるゝは、もしいひわけをせバ、まゝはゝころさるべし、まゝはゝころされられたらバ、ちゝの御心しだいにものうくなりてくるしみ給はん、これふかうたるべし。又天がに、ちゝのなきくにあらんや。はしる事もすまじきとて、つひにじがいし給ふ、又えいのせんこうの御子に、たいしきうといふ有、これも、まゝはゝのざんげんによりて、たいしきうをころさんとて、たのくにへ御つかひにおほせつけられ、みちにてころさんと、たくみ給へり、ある人たいしきうにつげて、御つかひに御出ある事、御むようたるべしと申す。たいしきうのたまふやう、おやのぎよいをそむくは子にあらずとて、つひにゆきてころされたまふ。かうかうのみち、一つかくれた、五りん五しやう、ことごとくかくる也、しかるゆゑに、ちうしんは、かうかうのかどにもとむといへり。かう／＼の子は、か

ならず、ちうしんたる事うたがひなし。かうかうはよろづのみなもと、天だう人だうのこんぽんなれバ、ろんごにも、かうていはじんをおこなふのもとかととけり。又佛もふぼきやうをときて、はうじてもはうじがたきは、おやのおん也、しゆみ山をせなかにをうて、大せんせかいをまはるとも、ちちはゝのおんは、はうじがたかるべしとどき給へり。しかるに、おやにふかうをなして、まいにち寺参りし、あるひは、せんぶまんぶのきやうをよみ、だうがらんを、こんりうしたるとて佛のうけ給ふべきや。かう〳〵の人は、その人しゝて、まさにごくらくせかいにむまるべしと、あごんぎやうにもときたまふ。さて、ふうふのみちは、まへにすこし物がたり申ごとく、ふうふの中、をつとも

をんなも、よくつゝしむべしと、こうしの五きやうのはつたんにをしへ給へり。其ほか、いづれのしよにも、まづ、ふうふのみちを、はじめにのせられたり。いにしへいまも、たかきもいやしきも、此みちにて、みだれざるものなきゆへに、べつして、いましめ給ふと見えたり。さて、きやうだいのみちは、あにはをとゝをあはれみ、をとゝはあにゝしたがふみち也。きやうだいはどしたしきみちはなし。こつにくどうはうとて、一たいふんじんなれバ、はなるべきやうなし。もろこしのこちくといふくにのていわうの子に、はくい、しゆくせい、とてきやうだい有、おやしするとき、をとゝのしゆくせいに、くにをゆづれり。ちゝしゝ給ひてのち、おとゝのしゆくせい、あにのはくいに申や

うは、御くらゐに御すはりあるべし。あにをおいてをと丶の、くにをつぐべきだうりなしとて、つひにくにをあにのはくいにゆづる。又あにのはくいは、おやのゆいごんあれど、われくにをつぐべきだうりなしとて、ともにくにをすてゝ、くらゐをつぎ給はず。又しゆんは、おと丶のしやうといふ人、あくにんにて、たびたびあにのしゆんをころさんとしけれども、すこしもうらみ給はず、をと丶よろこべバ、あにのしゆんも、ともによろこひ、かなしめどともにかなしみて、つひにゆうひといふ所のあるじに、おと丶をなされ、ふつきあんらくにしておき給へり。又ごかんのよに、てうれい、てうかうとて、きやうだい有。其ころ天がききんして、人をとらへて、ぞくどもがくらひけり。

あるとき、てうれいをぞくとらへたり。をと丶のてうかう、これをきいて、たへがたくおもひかなしみて、我としばられて、ぞくの所へゆきて申やうは、わがあに、てうれいは、此あひだ、やせてにくおちたり。われはこのあひだ、にくつきたり。てうれいをゆるしたまへ。われ身がはりにたつべしと、さまざまわびを申たり。ぞくこれをきいて、おにのめにもなみだにて、きやうだいともにゆるしたり。これ五しやう五りんのみちをたつることを、天あはれみ給ひて、きやうだいともにゆるし給へり。あらそひ、かならず、きやうだいよりおこれど、べつしてつゝしむべきみちなり。又ほういうのみちは、ともだちの中、すこしも、いつはり、そらごとあるべからず。ほう

いうのみちは、五りんのうちに、かろきやうなれども、おもきみち也。そうしといへるせいしんも、ともをもつて、しんをたすくといへり。おやこきやうだいの、申さぬいけんをも、ともだちはいふものなれど、大せつなる物也。しかれど、おのれにしかざるものを、ともとする事なかれと、ろんごにのせたり。ともだちの中は、いつまでもいんぎんにして、ふかきしやけふなどむるべからず。わんへいちうといふ人は、ひさしきともだちほど、よく、いんぎんにうやまひつゝしめり。こうしこれをきゝ給ひて、まじはりをよくする人なりと、ほめたまへり。又五りんのみちを よくつゝしむをじゆだうと申なり。高人きにん、さぶらひ、たみ百しやう、をとこをんな、いづれもそれ〳〵のくらゐ、れいぎはかはれども、おこなふだふりは、へだてなし。これをしらざる人を、ちくしやうにたとへられたり。ひつじは、ひざまついてちをのみ、みさごのとりは、ふうふをみだらずと申せど、五りんのみちをしらざるは、とりけだ物にも、おとりたりといへり。こうしの、人のおもては、けだもの丶こゝろとの給へり。佛はみちにちがへど、らいせにて、とりけだ物になるとをしへ給ふ。こうしは此世より、はや、とりけだもの丶心との給へり。此よにて、とりけだ物の心ならずは、らいせにて、など、とりけだ物になるべき、じゆだうも佛のをしへも、もとはひとつなり。天のかず五つ、地のかず五つなれど、五りむ五しやうも、天地のかずにもとづきて、十のゆびあるがごとし。かくの

ごとく、五りんのみちのかたはづれ、すこしき
きおぼえたりしとはり、ものがたり申候。さりな
がら、ちしやの申され候は、いか程しよをよみ
ても、だうりをしらぬは、よまぬにもおとれり。
しよをよまねども、五りん五じやうのみちを、よ
くわきまふる人、天のめぐみにかなひ、げんせあん
をんにして、ごせは、かならず、じやうぶつとく
だつの身となるべしと、ちしやの給へり。しかれ
ば、わらはごときのをんなの、しよをよまず。もん
じもしらず候ても、そのぎりをわきまへ、みちに
そむかぬときは、その身ふつきはんじやうして、
あくじさいなんをのがれ、ごしやうも、ともには
とけとなるべし。又五りん五じやうのみちをしら
ずして、天のめぐみに、もるゝときは、さま〴〵

のあくじきたる。そのとき、かみほとけへいのり
をかけ、きせいをするとても、いかでかみ佛のう
け給はん。いせんに申ごとく、いのらずとてもか
みやまもらんとの、きたのゝ御ゑいかをよくまも
るべき事也。たとへば、五じやう五りんのみちを
そむき、ねんぶつだいもくを、いかほどとなへ申
とも、なにのやくにかたつべき、たとへをひかば、
人の物をぬすみとり、あるひは人をきり、又は、
ちやうちやくして、御めんなされ候へども、手を
わはせてをがむとても、そのとがをゆるすべきか。
五りん五じやうの、おきてをそむくは、大なると
がなり。そのつみとがを、ねん佛だいもく、其は
か何たるきやうもんを、よるひるよみたてまつる
とも、いかで佛のゆるしたまふべき。又とがをせ

ずて、たとひ、御名をとなへず、手をあはせてあながちにおがまずとも、とがにおつべきだうりなしと、ちしやの、申きかされ候、いままでは、われらのやうなる、をんなわらんべの、おろかなるこころには、ねん佛さへ申せで、ごくらくしやうどへひまれゆき、だいもくをとなへぬれど、たちまち佛になると、こゝろえ候ところに、此ものがたりをきゝ、だうりをうけたまはり候へば、もつともしごくしたる、ぎりなれど、みな、をんなわらんべのおろかなるに、此ものがたりをつたへたく候ひてわれらうけたまはりたるとほりを申て候ぞや。此ほかは、ちゑある人に一つづゝも御とひ候て、身のとくになされ候へ。たゞ、とにかくに五りん五しやうのみちは、天ちのだうりなれば、

とりけだ物、くさ木、なにゝつけても、天ちのめぐみに、もるゝ事なし。ことさらにんげんは、ふかく天のめぐみをうるなれど、かへすぐ此みちをしらずで、わくじさいなん、のがれがたしと也、天ばつおそるべし〳〵とぞ、物がたり申けり。これをきゝて、おはぢ女ばうたち、さて〳〵有がたき御しめしかな。によにんの御身として、かやうのがくもんをなされ、われ〳〵のやうあるぐちもんまうなるものゝ、がつてん參りまうやうに、御物がたりなさるゝ事、ひとへに、人げんにてはよもあらじ。いかさま、いにしへのせいしんの、けしんなるべしと、人々手をあはせをがみ申けり。

此物がたりは、女四しよのぎりなるによつて、かなにかき、をんなしんぎものがたりと名づ

け侍る。

（終）

花ふゞき

塩井雨江

その五

何事を思ふともなくに、涙は落つるといふ秋なるに、玉だれのをすもる風をだに、厭ひ馴れにし御身が、誰れすゝむるとには無けれども、留るべき蔭なき都の門を立ち出で、天さかる遠き鄙の旅路に趣き、まぐさ苅る荒野の風に吹かれ、さゝのまろやの露に窶れ給ひては、一葉の色、一枝の影、何事か、断腸の媒、消魂のよすがならずといふことやある。

げに、御息所の御心細さは、さゝ蟹の糸にも似て、よる方もなく、力なげに見え給ふだにあるを、今宵思はざりける松浦の嵐の吹き荒れては、いかでか怺へむ。玉の緒は、はや絶えやはてつらむか、生きたるおん心地も無げに見え給ふ。

賤機も、すは一大事と、胸は頻に轟けど、われさへが、心弱くては、叶はじと思へ

ば、さな恐れ給ひぞ、武文もさて候、賤機も斯く侍れば、よしや、足曳の岩根のくづれたらむとて、わだつみの海のなごろの寄せたらむとて、熱くべうも侍らず。ましてや、もの數ならぬ山盗野武士の、百人五百人襲ひたればとて、又なき姫を、誰にか奪られ奉るべき。御心安くおはしましてやと、勇ましげに勵まし奉れバ、武文が必至の太刀風、さしも烈しく見ゆながら、なほ容易くは、拂ひかねたる賊の群、十重に廿重に、むらがりたれバ、翼無き身の、逃れ出るべき隙もあらず。内には續く頼みもなく、外には待つべき味方もなし。さかも、煙は雲とまき、火焔は、雨と降りかゝれバ、よしや、天を飛び、地を駈るとも、たすかるべき道さへ方さへ、絶えてあらまじきさまに見えにけり。

御息所は、所詮叶はぬ所と、覺期やさ給ひけむ。やよ賤機、とてもかくても、あさましの世や、何を頼みて、何時まで活きむ。かばかりはかなく、口惜しきわが世の中、今は露の命の、露ばかり、おきふしすべき心なし。生くべからざる身を、生きむと思ひ、あやしき下人の手にかゝり、穢き世に耻かしめ見むころ、やがて、過ぎ去り給ひし父母の名を恥かしめ、いはゝやすかしこき宮の御身を穢し奉るなれ。さ

ばかりになりてだにも、存命へんと思ふわが身ならじ。武文と汝れのみならば、一人ばかりは、とにかくに、八十太刀の間を、斬り拔けてなりと、踏み越えてなりと、逃れ出る道あらむ。土佐とやらへたよりつかば、津の國尼ヶ崎のあからしま風に、櫻はあへなく散りたりと、報せよかし。汝れ若し長命へてあらむ、東風ふかむ折〱は、香ばかりの手向けなりと、回向を賴むぞやと仰せて、覺悟のけしきに見えたまへる、賤機は、御手に取りすがり、さはとていかでと、留め奉る袖ながら、うちまほれて、力なきさまこそ、いとゞあはれなれ。

御息所は、よく〱、ひらぎりのみ、心固く思ひつめ給ひたる事の、今はたやすく聽き解き給ふやふもなく、武文といひ、汝れといひ、さばかり優しき心にしあれむ、われをば捨つるは、げに悲しからめ、親らも、捨てよといふは、いかむかりか悲しからずやは。されど、賤機。櫻がいふ事、よく〱酌みてや、親らとて、長らへまほしきは命なれど、さはとて捨つべきを、强に惜しみて、三人の者、諸共に、え生ずならむ、宮の御爲め誰かまた、島根の花をあつめ、苫屋の月を慰むるものあらむ。さてこそ、親を捨てよといふも、宮を思ふ情の切なればなれ。汝等も此處を捨てゝ

こそ、親らを悲しむ心の、誠に深きものならめ。のふ賤機、此の櫻が心のうちはかかり。わが思ふまゝに任かせよと仰せたまへど、賤機は、いかでかきくべき。いかならむ世までも、おん伴つかまつらむとおぼえ侍ればこそ、久方の都をも、いさみ立ちて、天雲の末はるけくも、思ひ來にけれ。徒に、水火の中に、姫を捨て奉り、わが身のみ生き殘らむは、心の心に侍らば、いかで雲をわけ、浪を凌ぎて、此處までは、參り侍るべき。おん道理は、とまれかくまれ。賤機の心根も、あはれとおぼして、何處の隈まれ、いかなるくれなれ、おん伴ばかりは、許させ給へ。それにて、不忠とうたはれ、不義と笑はれ侍らむとも、なかなかに、わが身の願ふ所に侍るをと、こも、又きゝ入るべきけしきなく、小松にまとふ玉かづら、離れぬ色のあはれやな。黑煙は、いよいよ御座をまき、火焰は、頻におん袖にかゝれば、賤機は、かくてやみみ灰と爲し奉る事やある、いづくにまれ、いかにしてまれ、血路を求めて、遂に道なくば、諸共におなじ刄の露とこそは消えてだに、おん伴まゐらせ奉らむといふ折りしも最期の御暇を賜はらむと思ひ定めて、御座近く退きかへしたる武文の姿に、いで父上、賤機こそおん前に立ちて、玉の緒の微塵となりて絶えんまで、導き

奉らめ。御身は御息所を助け奉りて、力のあらむ限り、おん供まゐらせて、續き給へ。血路つきなば、おん側を去らず、如何にも成り候はむといひて、はや駈け出むとす。

武文も、げにさなり〳〵、さすがにわが女や、いさましくも申したりと、思はずも莞爾とうち笑み、さらば許させ給へといひざま、御息所を、左手にこかとかき抱き奉り、右手に大太刀をふりかざし、賤機つゞけといひすてゝ、阿修羅王の荒れたるがごと、すさまじき勢にて、浦わの方を志し、林なす太刀中に、どつと聲たてゝ、眞一文字に斬り込めば、思はずも、むら〳〵と散るは、木の葉か水鳥か、影おもしろき尼ヶ崎べのあさぼらけ。

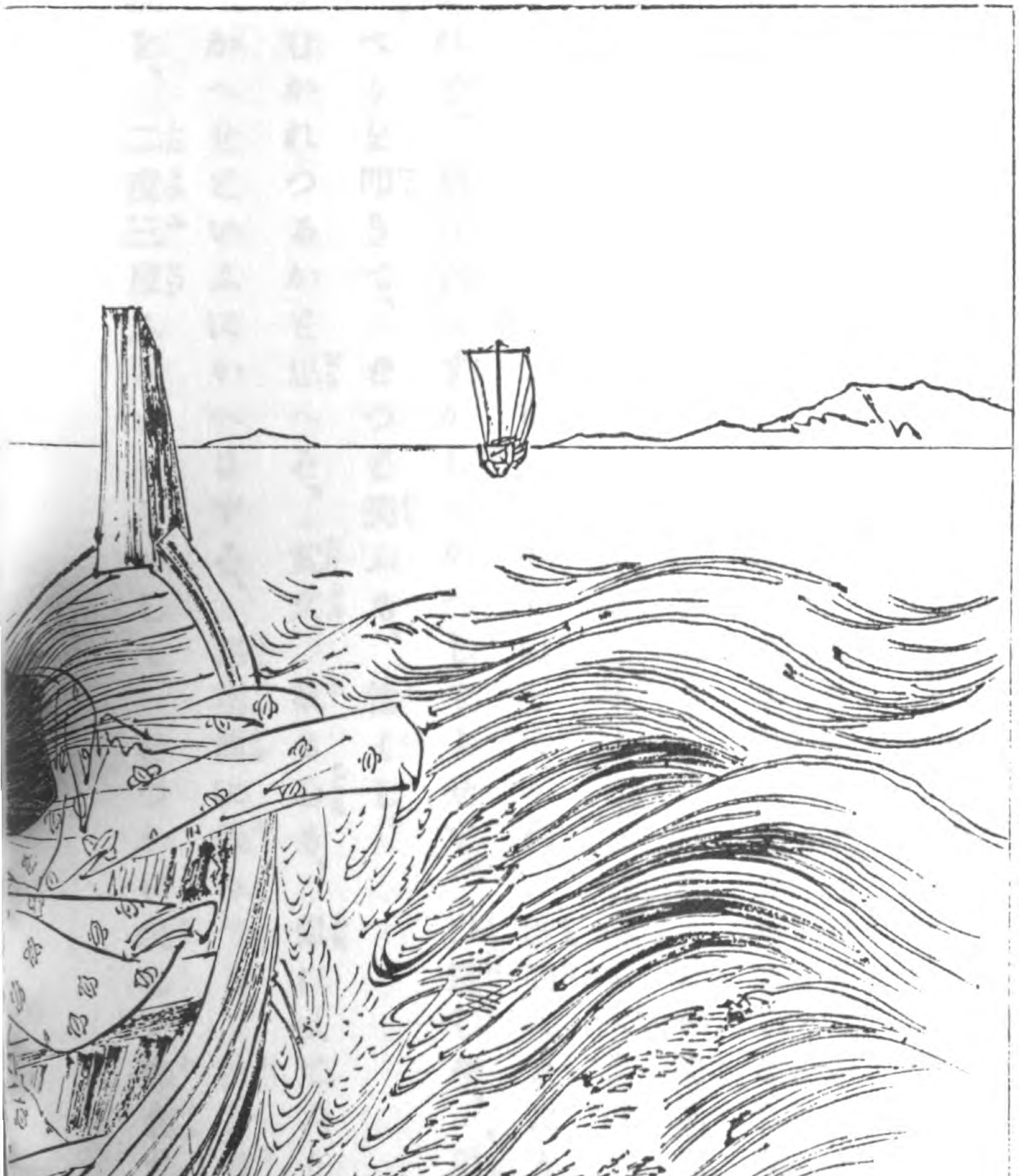
武文は、鬼なす勢もて、五郎が群がる賊を、うち殺し、蹴散し、踊りこえ、踏みにじり、わづかに、重圍の中を斷りぬけて、漸々に磯ちかく落ちのび、見かへれば、賤機は如何にしけむ、續かず。もとより覺期きはめたる上なれば、今更に心に留むべきにあらず、水岸なりける小舟を呼びかけ、こは旅の者の、山盜に追はれて、難義するなり。何處の浦へなりと、逃るべきたよりをこそ頼むなれと、強ちに乞ひて、先

人心地もおぼえさせ給はぬ御息所を、靜に下ろし奉り、玉藻の水を、おん口にむすびまゐらすれど、なほいきの緒の何處にか、絶えでや殘りおはしけむ。かすかに御眼をひらき給ひて、つくづくとうちながめて、ものも仰せられず。唯、賤機のあらぬは、如何になりつる、途よや斬られたる、後にやおくれたる、心えなや。武文、とくかへりて尋ね來よ。彼れが行方見とゞけでは、何處へも行かじ。不便のものや、いとほしのものやとのみ、わりなく求め給へば、武文も是非なく、心ならねど、暫時の間、御息所を舟人に賴みきこえて、長者の屋敷を心ざして、引き返したるが、思へば、又かへるよしなき禍とぞ成りにける。

浦もあらむ、舟もあらむに、むざんなるかな、御息所のたよりたまひたるは、松浦の舟、五郎の味方にて、斯る事もやと、兼てより待ち設けたるものなれど、望む所の客人と、思ふ心を色にも見せず。乞はるゝまゝに、まめやかに助けまゐらせ、武文をもすゝめて、陸へひき返へさしめ、よき魚こそかゝりたれ、今宵はうま酒の代を得たりと、心の中にうち笑みて、獨頻に舌うちならし、手早く松に懸けたる紐をとき、櫓を押し切りて、冲の大船へと漕ぎつけたり。

白波のかゝる事とは、神ならぬ身の、力なや。武文は、御息所のおん歎の、是非なけれど、我ならずも、陸へうちのぼり、かいくるあされど、賤機の姿は見えず。死骸さへもあはず。さては、人にや捕られたるか、火にや燒けたると思へど、今更に、そゞろあはれは催せど、なほ姫のおん上の、頻に心にかゝれば、はせかへりて、ありつる小舟を尋ぬるに、いかにしけむ、影も留めず。岸べたがへると思ひて、見れど、磯松の姿、岩根の稜、まさしく賴みつる影なり。此はしなしたりと、血眼になりて、見わたせど、沖なる大船に呼ぶ者あり。まさしく前の舟人なり。あな其の船しばしかへせよ。賴みてし上人を賜らむと呼べど、かへすべきけしきなし。心頻にいらだてど、下りたちて、三だんばかり磯をはなれ、波間にしたりて、此方へよせよとよばはれど、船は帆にまかしてかへしもよせず。口惜しや、扇をあげて、さしまねぎ、舟べりを叩きて、どつと笑ふも、憎くし。

あな、あざむかれつるかと思へど、武文、氣も心も、亂れはてたり。いで其の船、かへさずや。かへせといふにかへさずど、怨魂風に乘りても、吹き寄せくれずやはと、磯なる岩根を、二度三度ふみとゞろかして、どつかど坐し、無念と一聲、腹かきさ





なき、沖の方を睨みつめたるまゝ、眼を閉ぢず。烈風頻に岸松に狂ひ、怒浪もいらつて、岩礁を摧く音高し。

嗚呼、抜山の豪傑、蓋世の英雄も、力つきては、垓下一叢の露に及ばず。唯一の忠臣、千古の名士も、時を得ねど、湊川一流の水泡をまぬかれず。思へば、武文空かける翅なく、海たかる鱗なく、天地に君を救ふの望絶えはてゝは、尼ヶ崎渡頭の藻屑となれるも、又是非もなや。誰れか咎めむ、何か笑はん。これや、誠にやさしき忠臣の心なる、千秋の鑑なる。

此の親にして、此の女ありける賤機は、父に續きて、血路を求めたれど、いかにせむ。心ばかりは、拔山の豪あり、飜海の雄あるも、年は、げにや、雨をだにいとふ花の少女、身は、誠に青柳の風にだに堪へぬ手弱女なり。思はず、ものに躓きて、うち仆れ、あなやと思ひしより、しばしは後を知らず。ふと驚けば、身は小舟に乘せられ、賊とおぼしきに漕れたり。さては、もろくも捕へられしか、口惜しや。よし、たゞやは舟に任すべきと思ふ心を深くつゝみ、いと苦しげに水を呼べば、賊は垢掻きに、うしほを酌みて、近寄らむとするを、隙をはかりて、足を拂ひ、うち倒して

起しもやらで、またゝかにうちすへたる頭脳。拳は玉のさゝやかなれども、心は鐵金の凝りたれとや、さけびもあへず、生き絶えたるを、波間に投げすてゝ、辛うじて陸へ着き、なほ黒烟をたよりに、四五町駈せ近きたる磯の隈、父が姿に駈け寄るに、無惨なるかな覺期のさま。涙と共に取りすがりて、いたはれど、武文ははやものいふ事も叶はず。悲しや父上、姫は如何にと問へど、わづかに沖なる大船を指さすのみ。賤機は、さかしく、さては姫は、彼の船に奪られ給ひしかと問へど、はや武文は聞ゑずや、一滴の血涙、鐵胸を染めて、あへなく息たえたり。

賤機の悲しさは、いかなりけむ。姫を失ひ、父に別れ、今はわが事終れりと思へど、一度は、父の刃を取り直したれど、思へバ父が最期のさま、大船こそ姫を奪りたる敵とおはゑたれ。海原のかぎり追ひめぐりても、とりかへさずやはと、思ひかへして、父が髻、またと身に添へ、もと來し方へ引返し、さきに捨てたる小舟に飛び乘り、君を慕ふ一念、艫にとりすがりて、漕ぎ出でたり。

花菖蒲

千稻子

其十五

うらゝかなる光は拔きつれし太刀に映じ、閃々として絲遊の如くにきらめき、春の風の駒は鬣を掠めて吹くこと長閑なり

一度圍れたる敵兵を斬り破りて漸くに落ちのび來り、暫く駒を留めて疲れたる息を休むる折から、又も森蔭より表れ出たる數十騎の敵は、恰も海嘯の湧くが如くに寄せ來りて、驀地に駒を躍らせ、其中に大將と覺しき者、扇をあげて大音聲に呼はるやう、其處に落ちさせ給ふは、生田の森の大將軍新中納言殿とこそ見まゐらせて候へ、正なうも敵に後を見せたまふものかな、いざ返させ給へや、返させ給へと、砂煙を蹴上げて馳來るに、知盛卿は慨然として知章を顧み給ひ、如何に知章、一度は汝の力によりて危き所をのがれたれど、かく再び敵に圍まるゝは我運命の盡くる所と覺えたり。見苦しき振舞をなして敵の者に笑はれんより、潔く彼等と組みて討死するこそ本懷なれ。さは思はずやとのたまひて、鐙を蹈み張りつゝ一鞭當てゝ蒐けんと

云たまふに、知章は父の鎧の袖を扣へて潸然として涙を落し、弓矢を執る者は、日頃如何に高名を致し候ふとも、最期の時に不覺をなさば、長き瑕に候ふよし。今は御身も疲れさせ給ひ馬も又疲れて候へば、若し云甲斐なき郎等に組落されて討れ給ふ事もあらば、長き平家の名折となり候はん。何卒此敵は兒に御任せ下されと唯理を曲げて、彼方へ落ちさせ給はれ、知章が今世の御願にて候と、涙を揮ひて諫めまつれど、知盛卿はいつかな聞入れ給はず、御身の云ふ所は理なれど、若し逃足見する所を討取られ、平家の大將は何處迄も臆病なる事哉と笑はれなば、又此上もなく平家の名を汚さん。所詮のがれぬ所なれば、親子主從仝じ枕に討死するに勝りたる事あらじ。いざや續けと、駒の手綱をかへして靜々と寄せ來る方へ歩ませ給へば、今は留めまつらんやうもなく、涙を拂ひて知章は其御跡に續き、監物太郎又其跡をおひ、主從三騎魚貫の形をなして進み行けば、彼の大將とおぼしき者、扇を上げて其兵を叱咤しつゝ、自ら眞先に太刀を揮ひて躍り寄り、知盛卿の間近に駒を驅り來れば、二十騎ばかり引續きておめき叫びて馳せ集る、知章は父の危難の此有樣を見て如何で猶豫すべき、大喝して彼の敵騎の中に割つて入り、右に薙ぎ左に支へ、駒を

縦横に馳せ廻して奮撃數回、敵兵の七八人忽に霧の如き紅の煙の中に倒れ伏す。知章は、戰ひながらに屢々父を顧みて、父上、早く此隙に落ちさせ給へ、父上早く落ちさせ給へと、聲を限りに促しつゝ、尚知盛卿を支へんとする彼の大將の、鎧の袖を握みてむんづと引組んだり。

此隙に、知盛卿は駒を少しく退けて息を休め給ふ折から、俄然、彼方の繁り合ひたる蘆の間より走り出たる一人の若き婦女あり、如何に思ひけん、其持つたる杖をあげて力の限り其休みたる駒の後をハタと打てば、駒は驚きて一聲嘶き、後足に砂を蹴飛ばすと共に、寄せ返る白浪の中へざんぶと飛び入り、瞬く隙に數反ばかり彼方へ泳ぎ行きぬ。

＊＊＊

木の葉婆娑として傾きたる軒場を拂ひ、雪は山の頬を包みて寒月氷の如き片山里の寂しく、將、悲しきに堪へ給はず、御臺所はせめて我夫我子の籠り給ふと聞く、生田の森の其邊迄にても伴ひてよと、愁涙を揮ひて切に宣ふに、旅のわびしさはまた

一入なりとは知ろしめさゝる故、かく宣ふも御道理なれバ、留めまつるも心苦しくはあれど、霜に枯れたる草枕結びて、降りみ降らずみ定めなき時雨の空に迷ひ出でて、若し御体にさわる如き事の起らた如何にすべき。年立返りて稍春の光の色つきそめし頃にならバ、旅の空にも少しは御心やりになる事もやあらんと、かにかくと慰めまつりつゝ、狹き袖に絶間なき涙を包みて悲しき年を送りぬ。

巒峯の頂より落ちて枯れたる梢を流るゝ冬の風も、折々春ののどかなる色を伴うて、賤が破れたる籬の梅の花も　二ツ三ツ雪の中より匂ひ出でたり。おぼつかなくも心を決して、菖蒲は僅むかりの旅裝束を整へ、甲斐々々しく御臺所の御手を引きて、暫し住馴れたる此草屋を見棄てゝけり。

春とは云へど倘襲ひ來る風は利鎌の如くに膚を殺ぎ、霜は枯艸の上に横はりて孤雁の聲寒し。錦繡綾羅の中に包まれ給ひし御臺所の御身の、此寒さ此わびしさに如何で堪へ給はん。屢々行惱みて身をもだへ給ふに、菖蒲はあるにもあられず、我衣を脫ぎては覆ひまつり、我体の温に暖めまつり、勞り勵ましまつりて、我身は道のほとりに凍え死ぬとも御臺所を御恙あらせず戰の塲まで送りまつらんと、心に神佛の

御名を念じて、捧ぐる涙の露は血の如く赤し。或時は負ひまつりて霜白き落葉を分け、或時は御手を引きてこゝしき巖を踏み、我身は倒れ死なんとすること折々なりしも、堪へ〳〵て苦を嘗め辛を忍び、かくて行く〳〵道すがら軍の摸樣をきけど、鎌倉より差し向けられたる範賴義經の兄弟は、京都のほとりに木曾義仲と戰ひて容易く之を討ち取り、今や兵を二つに分けて平家の城塞を攻めとらん爲に下りしと云ふに、さては戰の初まりたるにやあらん。あはれ如何に恙なくましますか、おぼつかなし心もとなしと、菖蒲は胸の憂さ悲さを忍びまぎらして、御臺所を慰めまつりつゝ、漸に昆陽野まで來れば、日は全く暮れて弦月の影はのかに西の空にかゝれり。

此處に暫く疲勞を休めて遙に眺れど、所々に源氏の兵の燒きたる遠火の影は、晴れたる空を焦して恰も大輪の月の山の端を出んとする時の如くに紅なり。

かくて敵の軍兵に見咎められじと、忍び〳〵に終夜道を歩めど、濱邊の潮風御身に浸みて寒さ譬へん方なければ、御臺所は御身の疲勞に堪へ給はず、松の木陰に打伏して惱み給へど、御脊をさすり御腰を撫でゝ、起ちつ居つ勞りもし慰めまつりもし、

虫の歩むが如くに足を引きて、東方の天の白まんとする頃、漸生田の森の此へ來れり。

早や此時は一ノ谷を義經の爲に襲はれて、平家の陣中は亂潮の如くに狼狽へ噪ぐ時なりき。

然れバ、耳を掠めて響き來る鯨波の聲は、沈靜したる空氣を破りて思はず身を震慄せしめぬ。

文林

翠松　　近衛忠熈

春あきの花もみぢにもまさりけり
ふゆもときはの松のみどりは

東久世通禧

かれ葉みなあらしにつれて山松の
みどりさやかになれる冬かな

前田利嗣

朝ゆふにみれどあかれぬにはの松
いつもかはらぬ緑なれども

松浦詮

しも雪をよそにさかゆく松がねの
千代の緑のふかくもあるかな　津輕承昭

色かへずたてる野なかのひとつ松
みちゆく人のしるしなりけり　千種有任

いつみても松のみどりのあかぬ哉
うへこそ千代の物には有けれ　前田利鬯

春秋とうつりゆけどもときはなる
松のみどりはかはらざりけり　竹屋光昭

ふりつもる雪のしたより松がえの
みどりいよいよあらはれに鳬

としを經て苔さへふかき岩がねの
松のみどりは千代さかゆらん　本田忠貫

二葉より千枝も榮えてとことはに
みどりかはらぬ松のいろかな　池田政禮

年へぬるほどもしられてをかの松
みどりは深くみねわたるかな　水野忠敬

木枯もさわぐかひなくおく霜も
おくしるしなし松のみどりは　前田利昭

池水にかげをうつしてとし經たる　長谷信成

松のみどりの深くもあるかな

池水鳥　諏訪　忠元

いかばかり住みよかるらん朝毎に
かずまさりゆく池のみづとり

社頭紅葉　島津　珍彥

たつたやま紅葉の秋はあかりたへ
照るたへとこそ神は見るらめ

翠松　宮地　嚴夫

たのしくも庭の小松のわさみどり
いやとしのはに色ぞそひゆく

北鄉　久政

楢の葉もくの木もかれし岡のべに
ひとりいろそふ松のむらだち

植松　有經

ぬれてこそ松のみどりは增りけれ
しもに時雨にたふるのみかは

小出　粲

おしなべて葉がへぬ山のきは毎に
ふかきみどりや松のむらだち

谷　勤

檜もすぎもおなじみどりを山松の
ほかには千代の色なかりけり

內藤　存守

常盤なる松のみどりはわか木より
老いての後ぞいろまさりける

坂　正臣

浦松のちよのみどりはわたつみの
色よりふかく見えわたるかな

松本　高明

冬がれてあらはになれる山のはに
　のこるは松のみどりなりけり

大口　鯛二

春ごとにひとしは色のそひそひて
　ふかみどりにもなれる松かな

岩崎　勝從

かげうつす松のみどりに池みづも
　いろ深くこそ見えわたりけれ

尋紅葉　　平塚　雎鳩

うちわたす並木のすゑに色みえて
　のこるゆふ日や紅葉なるらむ

初冬　　三浦　千春

みいくさの旗てのかせにふす草の
　しもかれ見えて冬は來にけり

寒夜千鳥　　松本　道別

たき木こる鎌くら山の夜あらしに
　由比がはまべの千鳥なくなり

翠松　　鍋島　榮子

としどしに緑もふかくしげりあふ
　松をめぐりのやどぞのどけき

蜂須賀隨子

花もみぢときにつけたる色よりも
　そのしなたかく見ゆる松かな

前田　朗子

あらしにも雪にもたへて岡のべの
　松のみどりはかはらざりけり

小池　道子

芝生みなふゆがれはてゝ小松むら
みどり深くもみゆるころかな
北島以登子

しら雪をはらひてみればおい松の
千代のみどりの深くもある哉
松平　健子

霜雪にこともなげなるいろ見えて
松ばかりこそみどりなりけれ
中島　歌子

はなにつけ紅葉につけてやま松の
かはらぬ色のめづらしきかな
三輪田眞佐子

鷹狩

あはせたるしらふの鷹のは風より
雪ふきちらすみかり野のはら

寄書述懐

ふみ見れど山のおくにも道ありて
なほわけ入らむ程ぞはるけき
奥山　照子

夕霜

いりあひの鐘のひゞきに風さえて
おく霜しろしやまかげのいほ
師岡須賀子

時雨

ゆふ日かげ照るかとすれば小倉山
またかきくれて時雨ふるなり
埴井ふく子

鶉

あれはてし尾花のとこの風さむみ
聲かれがれにうづら鳴くなり
埴井てう子

落葉

このごろは月にくまなす影もなし
尾崎すう子

のきのかしはの霜にこぼれて

北進軍の人々のうへを思ひやりて　河野　文子

冬こ草の枯れふす野べの旅まくら
　いかにわびしき霜のよなよな

宍戸子爵の邸の紅葉を見まつりて　青木　春子

見わたせば紅葉しにけりやま姫の
　おりそかけたる綾と見るまで

山紅葉を詠る歌并短歌　海上　壽子

立田姫うしはきいます、秋やまの峯の木の葉は露霜にぬれてもみぢぬ、うるはしき色にしあれど山たかみ人ものぼらず、谷ふかみ人もわたらずいたづらに散かすぎなむ、よしゑやし山は高くもよしゑやし谷は深くも、もみぢ葉の匂へる陰にわれゆきて見む

たつ田姫おれるにしきか秋やまの
　松の木のまにはふもみぢ葉

早稲田の晩秋

松本道別

一日友をたづねて、早稲田の里にものしつるに、折しも秋のすゑつかたにて、早稲も晩稲もことごとに刈りはして、はさ、といふものしてかけたり。足稲の長くたれたるは、豊年の程しれて嬉しきに、そのさまの、楯なめたらむやうに、五百重に遠くかさなりて見ゆるも、都なれし目にはうら珍らしくて、そこともしらず、井形弓様の田道をたどり

行けた、江戸川の堤にいでぬ。山を望めば、楓柞百樛木は殘りなく紅葉ぢて、紅のゆはださらせるごとく、川を臨めば、花田の色ふかく、とこしへに流れたり。川のふた岸には、薄葦など村だち、枯尾花の風になびきて、なよ〳〵するもをかしく、水ぎはより、物の音におどろきて、三つ四つ二つ、雀といふ小鳥の飛びたつに、葦の花のちるも、わはれ深くて、げに、橋の名の駒留といふも、むなしからずとこそ覺ゆしか。（この橋の名さきには駒留さきしに今は駒塚さ志ろしあり）

いづれかまことなる

吹く風に尾花はなびきたつ鳥に　葦が花ちる駒どめの橋

橋を渡りて、芭蕉庵といふあり。またの名を龍隱庵といふ。古池の翁がすみし跡なりとかや。庭をかしきさまにて、秋の色ことに深し。今のぬしやたれならむ。心にくきすまひなり。これに並びて高き岡のへに、水分の神のみ社あり。石階をのぼりて、み前にぬかづくに、はや、入相の鐘近くひびきて、紅葉夕日に色ませて、これを折からの手向としてかへりぬ。

先祖を祭る文

女子高等師範學校生徒　枝吉鶴

いそのかみ、ふりにし世に、むら雲たちさわぎて、筑紫の海、波高く、聞ゆるものは、はづへのひゞき、矢はずの音、見ゆるものは、とりでの火影、荒野のかたねのみよて、人々生けらんこゝちもせざりきとかや。今思ひいづるだに、身の毛もよだつ

ばかりなるを、我が遠つ祖の命は、戈とり、太刀
はきて、大御いくさにしたがひたまひ、彈丸のあ
られ、征矢のあめ、降りしくなかを、たゆまずひ
るまず、進みて、まがものどもを、野に山に戦ひ
給ふこと、あまたゝびなりしかば、遂に、雲霧晴
れわたりて、天の下平らぎけるまゝに、みかど、
いとほめさせ玉ひ、つかさ位さへたまはりて、や
がて、これの家はじめ玉ひ、朝には早く公にい
でゝ、夕には遅く家にしぞき、内つゝまやかにし
て、外まづしきをめぐみ玉ひし徳にや、こゝに、
いはつ春秋を經て、御祭たえず。數ならぬ身も、
御代の恵にもれず。うらやすく、この日をすぐす
は、いともうれしき限になん、いまや、大御まつ
りごと朝廷にかへり、五日の風、枝をならさず、

十日の雨、つちくれをやぶらず。家々足らひて人
人よろこび、薪こる山がつも、藻塩やくあまも、
筆の林にわけいりては、言の花をかざし、硯の海
におりたちては、ことばの玉をひろふめる。やす
らけく、ゆたけき御代となりぬるを、天かけり、み
そなはして、うれしとこそはおぼすらめ。抑、事
のなれる、なれる日になれるにあらずとか。今の
御代、はた、いかで今の時になれりとせん。皆、
あがりたる御代の人々の、御いたつきに、よれる
にこそはあらめ。いでや、垂れ玉ひつる家の御を
しへを守り、身を修め道を行ひ、つとめはげみて、
明けき御代の、大御恵の万一にこたへまつらんこ
そやがて、我が遠つ祖の命の御恵のかたはしに、
むくいまつるわざなめれ。おのれ、おちなけれど、

そをかたく心にちかひて、いよいよ、いそしみつとむべくなん。あはれとみそなはし、導きたすけさせ玉へや。けふ、これなる屋に、やから打集ひて、たなつ物、はたつ物、めづらかなるかぎり、とり供へて、御前祭りたてまつるを、平かにきこしめせと、拜みかしこみまをすにそへて、思ふこゝろの一ふしを、御まつりの詞にかへて、聞えまつるにこそ。あなかしこや。

藤園主人評、此文、始に世の亂れたる事をいひ、つゞいて、わが先祖の、其亂世を鎭めし、軍の功ありしことをいひ、さて、世治まりて、わが家を開かれしことをいへる、順序あり、かやうに歷史を述べて、遂に、明治維新に及び、それにも功の及べりといふことを、ほのめかしていよいよ先祖を貴び、其貴を身に負ひて、萬一に報せんといへるなど、よく情をつくしたり、末段に、床はき清めて、海山の物奉り、そがむことを述べたるにて、此文の精神、一層たしかになりて、始て題意にうちあひたり。祭文は、かくこそ書かまほしけれ。

望遠鏡

女子高等師範學校生徒　津和崎こう

萬物の靈などいひて、いとも賢く、いともすぐれたるやうに、我も人も思へるは、大なるひがことぞかし。我等は、しばらくの間つゞけはたらけど、忽ち疲れて、手足のだゆきを覺え、やゝ遠き野山を望めば、花紅葉のいろも、さやかには見えぬに

あらずや。されバ、我等は業を執るは馬にも若かず、物を見るは鷹にも及ばぬなりけり。かくてもなほ、靈なりとほこりうべきやは。まして、生も命もなき、金石にけおさるゝことあるは、いかなる事ぞ。かくいはゞ、怪みとがむる人あるべし。そは、望遠鏡を思ひ合せなバ、その疑ひ、自、とくべし。そも此の器械の構造は、使用する目的に從ひて、種々あるべしといへども、主なる部分は、何れにありても、只二つの「れんず」と名くるものにあるなり。我等この鏡の力をかりて望むときは、はるかなる野山の花紅葉を、居ながらもてはやし得るのみならで、いくさ起りて敵の陣など、うかゞふにもたよりよく、また、幾百萬里をへだてたる、高き廣き大空の有樣をも、精しく見ることを得て、天文學の上に著き進歩をなし、これまで人の知らざりし、あまたの星を見出して、何の日何の時何々の變化天体に現はるべしなどいふをも、豫め知りて、つゆたがふことなきは、全くこの器械の力によるぞかし、これ、我等のけおさるゝゆゑよしなり。されど、つら〳〵思ひめぐらせば、かゝるいみじき力を備へたる、器械を創造したるものは、誰ぞ。勢力つよき馬にもあらず。眼力鋭き鷹にもあらじ。是、人なるべし。

人の萬物に靈たるゆゑは、手足目鼻あるがためならで、すぐれたる心あるがためなり。此すぐれたる心ありて、さるいみじき器械をも、發明するなり。されば心の玉を磨にみがきなば、猶此器械に勝るものを、發明すべきこと、疑なかるべし。

雜報

● 御歌會始御題　明治廿八年御歌會始の御題は、「寄海祝」と仰せ出され、詠進書式並に期限など、左の通り定められたるよしなり。

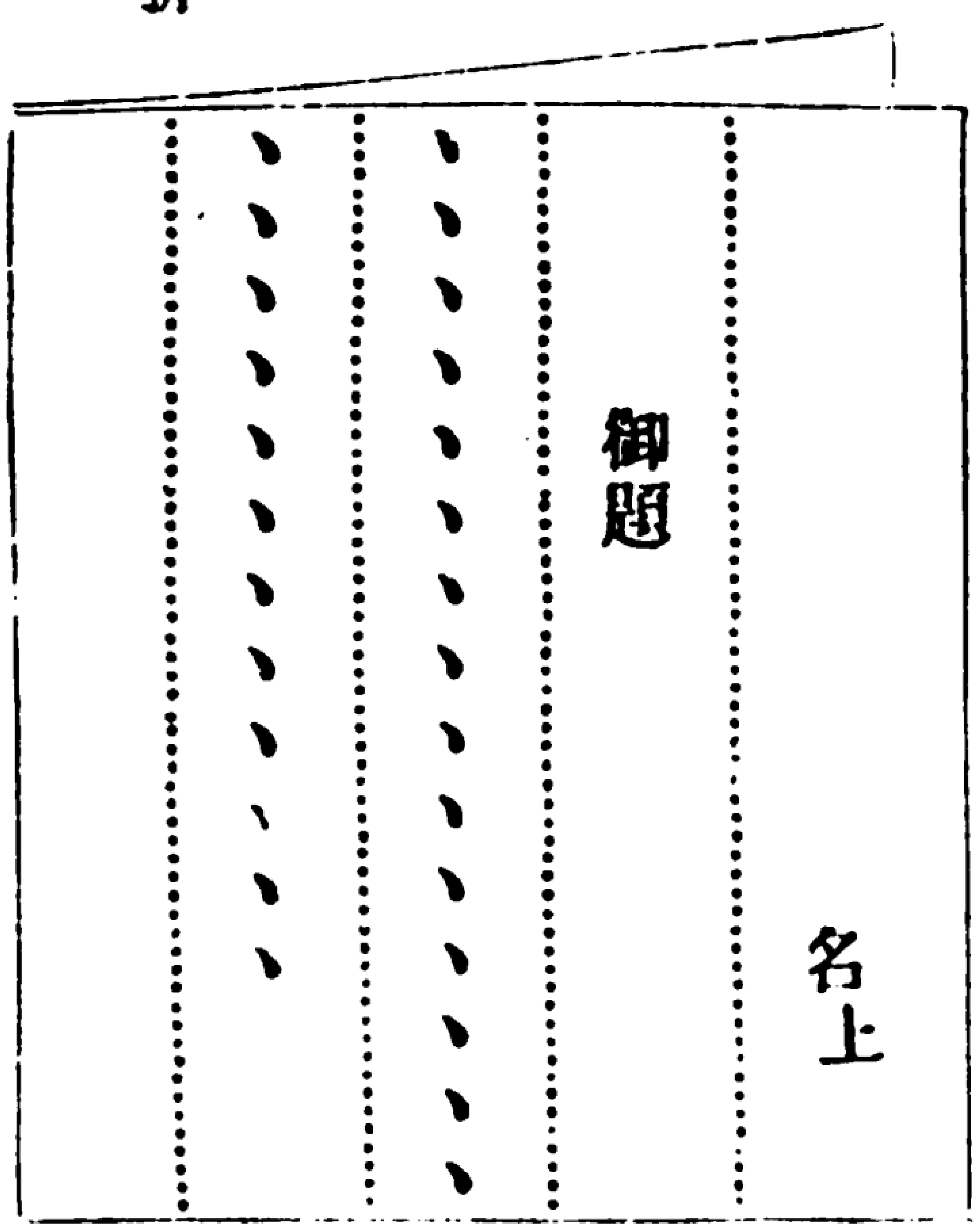
料紙、檀紙奉書、杉原紙を用ふべし

但し遠地郵送の分は美濃紙、渺葉の類を用ふるも苦からず且つ詠進期限は一月十日まで

竪

詠草

但シ五ツ折



裏面書式

某府縣下某國某郡市某町村住

華士族又ハ平民

苗字名

（官位勳等有爵者ハ苗字ノ上ニ記載スベシ）

● 烈婦看護婦募集を聞きて立つ　嶋根縣神門郡今市町に、安子となむいへる烈女あり、錦織弘毅といふが妹にて、先つ年陸軍三等軍醫片寄次郎が許に嫁ぎしに、不幸くて間もなく夫に分れ、夫よりは兄が家にありけるが、未三十ぢに足らぬ盛の身もて、心は、常に冷なる亡夫が墓下に通ひて浮たる事なく、武人が勇しき裝見るに付けても、吾

夫も世にあらバ斯くあらましと、袖に時雨の干す間なかりしに、今度清の國と戰起りてより、亡夫が同僚らは、皆砲の烟彈丸の霰の下にありて、忠勤を勵む功名手柄の話聞くにも、我夫はいかで斯る大事に洩れて先だち給ひしぞと、身も世もあらず泣き明し泣き暮し、手向るものは、花にもあらず草にもあらず。涙に濡れし捷報の新聞を靈前に供へて、責てもの慰とせり。折しも同縣下に看護婦の募集ありしかバ、是ぞ亡夫が志繼ぎて、み國に盡す時なりと、健氣にも思ひ立ちしが、儘ならぬは浮世の常にて、茲に安子が一ツの困難は、一年程以前より病床にある老父が身の上なり。吾今家にあらなくバ、老いたる父が看護を誰がすべき。亡夫の志繼ぎたりとて、父に不孝とならば何とせん。如何にすべきと心千々に迷ひて躊躇ふを、父は見てとり、安子を戒めて、凡孝養に二道ありて。一は身を養ひ、又の一は心を養ふなり、今汝が看護婦となり國に盡すは、吾心を養ふとて、吾は痛く喜ぶところなり。何の躊躇ふことやある、と云ふ側より兄も、汝が留守中は、萬事此の兄が引請くれバ、父が事には心置きなき行て務めよ。西の國の藪鶯にのみ、名譽をはしいまゝにせしむべきやはと勵まされて、安子も、さらバと勇みたちて廣嶋に赴きしとなむ。聽くも須賀〳〵しき話なり。

●優しき少女　横濱花咲町渡邊彌太郎の娘、お玉お八重といふ二人の姉妹は、まだ両手の指數にたらぬ程の幼心にも、父が日毎に讀む新聞を側に

ありて聞き、此頃の事を、深くみ國の大事と感じけむ、各小使錢若干を出しこ某氏に托し、海軍監理部へ獻納したる由、優しき心がけなり。

●岡の櫻池の蓮も物かは　東台の麓、不忍の池の邊に居をしめて、閑靜に住み給ふ、さる高貴き家の令孃は、世の諸孃の、成るに任せて華奢を盡し給ふにも似て、髮衣裝よりして其他何くれと萬事質素を旨とし給ひ、日每に學校へ通ひ給ふにも徒歩にて、そが上に十歳ばかりなる二の君と、幼稚園に行き給ふ六歳ばかりなる三の君とを連れ給ふて、自ニの君が手を引き給ひ、乳母には唯包物ばかりを持せて、不忍の馬場をたどり給ふに、三の君の幼き心には、他の童らが犬追ひ球なげなどして狂奔るを見ては、共に遊ばんとし給ひ、或は美麗しき蓮の花、をかしきその實を見ては、それ欲し、姉上乳母、取りて得させよとて、得ざれば、果は學校にも行かじなどのたまひて、むづかり給ふを、令孃種々に透しなだめて連れ行き給ふ。亦雨の日雪の朝などは、偶々車に召し給ふ事あるも、二の君と相乘りて、三の君を自ら抱き給ふなど、其の優しく情厚き擧動は、他所に視る目にも涙溢るゝ程なり。有がたき心掛の令孃の、今の世にもあるもの哉。岡の櫻池の蓮も、令孃が麗しき淸き心に比べては物かはなど、洟交りに、池の端の或る茶店の媼が語るを聞きしとて、投書のありける儘こゝには物しぬ。あはれ、世の諸孃も悉々に斯くありたくこそ。

●浪速艦乘組員より將校貴夫人への禮狀　曩

に帝國軍艦浪速艦々長以下將校の貴夫人が遠征の勞を慰せんが爲に同艦乘組下士以下一同に鯣烏賊を寄贈せられしが今同艦乘組員一同より左の如く其厚情を謝したる書狀を送り越されし由なり

宣戰の大詔一たび下るや我國民は朝野を問はず尊卑を論せず其志靡然として義捐救恤の擧に傾かざるはなし是れ固より我神州國民の氣象萬國に比類なき所以にして又我軍の大勝を豫期するに足る者と云ふべし玆に帝國軍艦浪速艦々長以下將校の貴夫人各位は協力一致して本艦乘組下士以下一同に若干の鯣烏賊を寄贈せらる其の吾々軍人を愛敬し戰勞を慰撫せらるゝ厚情豈に筆紙の能く謝し盡す所ならんや況んや各位は是れ皆吾儕下士以下一同の旦夕賴て以て父兄と仰ぎ頭首と貴ぶべき我浪速艦々長以下將校の貴夫人各位にあるをや其吾々の感情果して如何ぞや吾儕等各位が優渥なる厚情を感激鳴謝すると同時に倍々愈々奮進勇戰國家の爲め斃れて后ちに已まんことを期す玆に聊か蕪詞を裁し謹て各位の厚情を叩頭鳴謝す軍艦浪速下士以下一同

●女學者の隱藝　去る十八日の讀賣新聞に、駿臺高き處、夙よ日本流の婦人教育家として其名隱れなき、東奧の女傑平田女史は、曾て短褐敝衣郷を辭して東都遊學の途に上り、貧窶の中に螢雪の功成りて、縉紳の信任も厚く、性行嚴肅學問該博最も書を能くし、頗る君子の風あるより、日頃交際せる人々席を同ふすれバ、覺えず襟を正すとな

り。近頃の事とや、本郷元町なる女仙史柳川方に圍碁の會ありて、多くの縉紳寄り集ひし中に、平田女史も餘儀なき招待にいたれバ、やがて烏鷺戰終て一同に酒飯を出だせしに、婦人とては主人の仙史と平田女史とのみ。斡旋の勢は孰れぞ、いづれも装嚴に戯むる者さへなかりしが、醉の進むに従がひ、紳士等は興に入り、仙史に向ひ、琴棊書畫とて音曲も君子のたしなむべき一つ、仙境とて憚りなし。一曲奏でゝ打興じ給へとあれぞ、仙史いかにもと一面の大和琴取り出し、一彈一撥徐かに得意の名調を奏せしに、さしもに亂れし酒客も耳を傾け、暫しは水を打ちたるが如し。曲終りて一同感服の意を述べ、今度は平田女史の番なり、平素は兎もあれ、今日は柳川仙史もなされし事、是非共何か伺たし。ならバ劍舞にても苦からず抔、容をあらため眞面目に強しに、女史も迷惑の面地なりしが、果は柳川仙史迄も勸るに、然らぞと、乞うて三味線の調子合せて、嬌音滑かに唄ふ淸元は、女史が平素の武骨なるにも似ず。新柳二橋の紅裙また後に瞠着たる程なりしかバ、始に強ひたる人々も呆氣に取られて、恐縮の意を表せしが、之より女史が此一事は、端なくも上流社會に聞えて高くなりしとぞ。油斷のならぬ世の中なり。

●此頃までに賞與を受けたる婦人左の如し。

熊本縣士族野村傳一郎養兄故虎太郎寡婦

く　て

文久三年野村虎太郎に嫁し慶應二年虎太郎は審

命を以て征長の役に從ひ戰死せり當時くては年紀尙は二十二、再嫁を勸むる者ありしと雖も貞節を守り固く執りて聽かず只管舅姑に孝事して亡夫の祭祀を奉し現戶主傳一郎の迎へて亡夫の妹もゝゑに配するや四男一女を舉け家族十餘人多きに及ふもくて善く其中に處して家の輯睦を致し姑は十餘年前に世を去り舅亦本年死亡せるも其病臥中は日夜寢食を廢して看護に力を盡せし等玆に二十年の久しき志操一日の如く洵に奇特と此仍て其賞として金三圓下賜す

●年廻舍小會の分は左の如し

十一月十二日小會

當座通題

竹間霰

窓のそとの竹うちそよぎふくかぜの　前田　利聲
おとにまじりてふるあられ哉

竹むらのすゝめの聲もさむげなり　増山深雪子
玉とみだれてあられたばしる

竹むらのかぜにみだれて笹の葉に　大河内一子
ふりもたまらぬ玉あられかな

ひろはむとするまにきえつ吳竹に　鈴木　重嶺
たばしるあられ玉と見ゆれど

ねやのとの竹にたばしる玉あられ　加藤　安彦
見はてぬ夢をくだきつるかな

すさまじき音ばかりにてたまらぬは　佐々木古信
竹のはやしのあられなりけり

颪そよぐ音もきこえてさびしきは　青木　修
あられたばしるにはの竹むら

音たてゝあられはふれど竹の葉は　櫻井　尙保
ぬらす顔なるそよぎなりけり

うちそよぐ音も身にしむ此あさけ　鈴木　重信
霰ふるなりやどのたかむら

くれ竹のふしどのすゞめ寒からむ　千野　千艸
み雪まじりにあられふるなり

かげくもる窓のむら竹おとだてゝ　荻野みね子
さやぐをきけばあられなり鬼

さよふけてまどうつ音に夢さめて　後藤　兼子
笹の葉さゆぐあられをぞきく

まどちかき竹のさえだに風さえて　飯田いね子
音もまぎれずあられふるなり

おひのげる竹のはやしに音たかく　諏訪　晴子
玉とみだれてふるあられかな

夕時雨かゝると見しはすぎゆきて　諏訪　忠誠
たけのさ枝にあられふるなり

まどちかき竹のさ枝にたまあられ　會主諏訪　忠元
こぼるゝおとも寒き夜半かな

十二月兼題

五日
歌……雪中松
文……寒夜の讀書

廿日
歌……埋火
文……光陰を惜む說

教の庭

十一月廿日兼題　朝時雨

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天
朝きよめせんとおりたつ庭の面に
おち葉とともにふる時雨かな
府下赤坂區一ツ木町　羽田三緒子

地
人とはぬ柴のあみ戸をあさまだき
おとなひがほに降る時雨かな
愛知縣寶飯郡下地町　永井さい子

人
朝がらす鳴きわかれ行く山の端に
うき雲まよひしぐれふるなり
埼玉縣北足立郡浦和町　大橋てい子

高根にはゆきに朝日のかげさせど
ふじのすそ野は時雨ふるなり
青木春子

大空はいかでしぐれの降りわけて
あさ日の影にさはらざるらん
石井德子

山の端はちら／＼のぼるあさ日影
いかでふもとは時雨ふるらん
平野君子

山の端にほの／＼うつる朝日かげ
はれぬと見れど又しぐるなり
磯部つや子

朝日影さすかと見ればうきくもの
はれみくもりみ時雨ふるなり
諏訪晴子

起き出ていづる日影をまつ間にも
またくもりきて時雨降るなり
江馬信子

出る日のかげみるひまもうち時雨
よはにかはりしけさの空かな
高作貞子

冬の夜はながきかぎりと思ひしを
けさもまくらの山ぞしぐるゝ
高井米子

山の端ははれて朝日のさしながら
ふもとのさとは時雨ふるなり　上野　兼子

小夜時雨いくたび夢をさそひけん
けふも晴せずまよふうきくも　土生　清子

案山子のみ殘きてたてるひつぢ谷
けさはさむくも時雨ふるなり　神田　榮子

賤の男がわさでの岡に日はてりて
かや苅るそでに降る時雨かな　神田　靜子

打ち渡すむかふの岡のもみぢばも
けさのしぐれに色やますらん　溝口　秀子

まだ殘る紅葉やあるとたづねきて
今朝もやま路にふる時雨かな　溝口　寛子

朝げたくさとの烟りの見えそめて
のきにおとのふむら時雨かな　溝口　純子

浮雲のへだてやありてむらしぐれ
のきの朝日のかげにふるらん　內田　竹子

鳥がねに夢をやぶりておしあくる
あさまだたゝくむら時雨かな　佐々有郷子

朝ばらけ時雨のあめにそでぬれて
なさへなつかし笠ぬひのさと　澤田　春子

木の葉ちる音にまがひて朝ばらけ
そらかきくもり時雨ふるなり　德永萬壽子

今朝もまた時雨ふるなり少女子が
すゝぎし衣はしあへぬるまに　草野　花子

さなきだに淋しき者をけさはまた
袖ぬらせとや志ぐれ降るらむ　安田つぎ子

幾度かけふも志ぐれにくもるらん
いづるあさ日にかゝるうき雲　羽田千世子

峯の雲はるゝと見ればやまもとは
日影ながらに今朝も志ぐるゝ　宇多田揚子

神無月みねはあさ日のかげみえて
ふもとのさとに時雨ふるなり　瀬戸さと子

夜もすがらいづくめぐりて我宿に
けさおとづるゝ時雨なるらむ　師岡千代子

旅ごろも朝たつひとをおくり出て
ながむる空に志ぐれふるなり　千賀しげ子

置く露の未だひぬまになり出でゝ
あしたせはしきむら時雨かな　南大路正子

朝日かげさすや軒端におとたてゝ
　くもらぬ空にしぐれ降るなり　南大路芳枝

朝日影さす間もあらずいくたびか
　くもると見れど時雨ふるなり　磯野　玉子

むかつをの朝日のぼれる松が枝を
　ぬらしつゝ行くむら時雨かな　土屋てい子

吹風のけさはいたくも身にしみて
　いた戸おくれば時雨ふるなり　橋本　丹江

鳴きつぐるとりの翼やしめるらん
　あさ風さむくしぐれふるなり　鈴木　秋子

柴人をしばしとゞめて今朝もまた
　みやこ路とほく時雨行くなり　吉田　芳子

朝ぼらけふもとをぐらく山ぎりの
　はを打ちちらし時雨降るなり　太田さだ子

宵の間の風に木の葉はちりはてゝ
　けささびしくも時雨ふるなり　田邊てい子

千々にそむ秋の木のはのちる者を
　けさもあはれに時雨ふるなり　伊達富貴子

朝なく〳〵時雨ふりゆくやまざとは　水谷　清子
　あきのすがたも深く見えけり

有明のつきはくも間にかげ消えて
　けさふりかはるはつ時雨かな　植木　鋼子

さし登る朝日のかげをよこぎりて
　過ぎ行くくもは時雨なりけり　田村　倭子

山の端はあさ日させども賤が家の
　のきはしぐれの音のみぞする　松尾あさ子

村雲のはれ間にあさ日さしながら
　みねのあたりは時雨ふるなり　淸水　玉子

朝日にもさはらぬ見ればむら時雨
　ふるは山よりこなたなるらん　烏山　龜子

さしのぼる朝日の影は見えながら
　賤がのきばにしぐれ降るなり　降田　槇子

朝戸出のころも手寒しきもとゆふ
　かつらぎやまに時雨ふれゝむ　柳　滋子

今朝もまた晴れみ曇りみ定まらで
　ひかげながらに降る時雨かな　岡　佐波子

朝いしてまだおきやらぬ床の内に
　おとづれて降るむら時雨かな　小野田信子

千草かれあれにし庭のあさつゆの　畠山千代子
はしあへぬ間に時雨降るなり

夜半にみし月のあたりのうき雲は　安東菊子
けさの時雨となりにけるかも

今朝もまたはれみ曇りみ定めなく　碓井信子
おともあはれに降る時雨かな

山里のみねのこずゑはのこりなく　碓井武子
けさのしぐれに紅葉しぬらん

浮雲をかせのまに〳〵みだしつゝ　碓井和可子
けさも時雨のいとゞふるなり

十一月廿日兼題
文會に友を招く文

天　府下芝區三田四國町　師岡千代子

時雨かちなるこの頃いよゝ平かにおはしますにこそさては先つ日のたまはせつる文章會の事よ全し心の君達もいと多かりければ師の君へ聞え上げつるにいたく愛でさせ給ひて添删批評の事さへうべなはせたまひたれといとうれしくて折過さすこの月第三日曜のひるごろよりおのれが方にてそが初のつどひを開かむやと思ひはべりまた兼題も師の君のねらむせ給へるにて遠征を憶ふ孝女の俤紅葉を見ての内いづれか一題もたらせ給はん定めにはべるその日は師の君にも渡らせたまひて作文につきて色々の話せさせたまはんとのたまはせられつれど定めなきこの頃の空にならひたまはで必ず〳〵おはしてよ今より切りまちはべるになむかしこ

地　松山市鐵炮町　鳥山龜子

世に樂しきことは多かれど心のまゝに花鳥の色音を見きゝて歌によみ世のありさま人のまじらひをよく文にかきとるむかり心ゆくものはあらじと我師の翁ののたまひつる今も猶耳に殘りたれど御もとにも忘れたまはざるべし此頃おなじ心の友どち五人三人月ごとのはじめの日曜に文かくまとゐをおこして何某の大人のもとに添削をこふことゝな

ー侍りぬおすはやがて其まとゐの日なれど御もとにもおなじまなびの窓に雪螢をあつめしむかしを思ひ出ゐひてふりはへて御車をめぐらしたまひねかじさらバこの莚のひかりをもそへわかき人々のふるきをたづねて新しきを知るよすがともなり侍りぬべけれどねもごろにこひまつるになんあなかしこ

人

府下神田區錦町　橋本丹江

年月のひまゆくこまのあしはやくことしもはや半むくれはてゝ文月となんなりぬるさてもいにしへは七夕のみやひことありしかど今はたえてそのおとをとゝめずわづかにかたゐなかにのみそのこれるとはきゝぬわらはらいにしへふりをまねひてみやひめかすにはあらねどふみ月の名にちなみて一日ふみの會をもよほさむとぞおもひたちぬるあはれ月のかつらのひめきみたちよ雲のさはりもましてゞすは去づがふせやまて御こしあらまほしうなん

佐々有郷子

まがきの菊はみつよつさきそめぬ明日の會にかきながすべき文題も菊によせての詞となんいふめれバ心ありげにはひぬるかと思ひ侍れど寄香をみながら一枝たをりてまゐらすなは心なき手すさみとなとがめたまはではや〳〵御車をきしらせて朝まだきよりとひ來たまへあなかしこ

安田つぎ子

昨日より寒さいや増して心惡けれど曉つ方より降りいでし雪に沸醉蕭く銀世界の看えを爲し賤が身さへも俄に瑤の臺に住める心地し彌陀の淨土とやらんも斯くやと計りに疑はる獨り爐邊に眠らんも心なけなれバ例の通り二三の友打ちより觀雪がてら文の話などせバやと思ひ侍れど道すぢのなやみは去る事ながら直に御車を抂げられん事こそ願はしけれ

宇多田揚子

月紅葉にをかしかりし秋もいつしか過ぎて我が山里は窓打つ時雨の外に音なふものなく淋しさまさ

る冬とはなりぬされど其の心細さいはん方なく身にしみて忍びがたくくらしつゝある折しも昨日今日は例にも似ず空すみ渡り風さへうち靜まりてさす日の影は暖かにいと長閑なる小春の日よりを幸ひに心ある友どち打つどひ文の席をひらきたがひに思ふ心の一ふしを試みなばこの頃のつれ〴〵も慰みなましとおし量らるゝまゝにはかに筆とり余らするになんあはれ同じ御心におはしまさばはやはやと御車めぐらしてけふの光を添へ玉はん事をかへす〴〵も願ひ奉るになんあなかしこ

土屋てい子

おなじ心ならむ人としめやかに物語りすることそこよなきたのしみなれそが中に學びのはらからうちつどひて庭ひなき語らひはまたなくもいはれぬむつびになんあるさて此の日に庭の梢に散り初めて夜にいたく長きにまかせ國風會といふを思ひたち侍りさて万葉古今の古風を慕ひ源氏狹衣のみやびを學ばんため師の翁をむかへ奉りて諸ともにいにしへふりを問侍らむばいと〴〵たのしかるべしとおもひより侍るまゝ明日の夜かならずいらせたまへそは例のおなし心あひぬる友どちなれば庭ひなくしめやかに御物語うけたまはらむとかく申しいれ侍りあなかしこ

太田さだ子

日來の時雨に向ひの山のもみぢも最とよし色附き薄きこきこきませたる見ばえは今二三日がほどと思ひ煩ひ侍るを幸ひ明日はかしこくもすめらぎのあれましゝ大御祝日に候へど學びの友どち打ち集ひて大君の千歳を壽き且つは花紅葉をめでゝあかぬ思を文に物し侍らむ學びの道にも友垣のむつびにも一入興あるわざならんと思ひたちて何子何子の君らへも申し置き侍りぬ御前もこの道には深く御心染めの方に入らせられ候へばよろづの御障りも打ちのけて早〳〵御越し被遊度待ち奉るになん定めて心ある御方〳〵の筆のあやは秋の錦にも劣るまじくなんあなかしこ

植木　鋼子

晴間なき時雨の空のいぶせさにうさをやらんと思

ふどち打つどひ文會てふを開かんと昨日の程を契り歸りぬいづれも學びの道にはをさなき者のみなればいひ出る言の葉かき集め難波津のよしあしわりわけんためいかで姉上をもまどゐに迎へ參らせたくなん御暇おはしまさば必らずのぞみ給ひてよ御ゆるし有らバ人にもさこそよろこび侍らめあなかしこ

降田　槇子

冬枯の氣色のあはれなるは秋にもをさ／＼劣らじとはげにさる事にて時雨の降るをりなどはことにさう／＼しう侍るを靜けき御住居は如何におはしますにやをりにつけたる御歌どもあまた物し給ふらんと推しはかり侍りさてさいつ頃御物語侍りつる文會之事某等大人に語らひ侍りしにいと喜ばせ給ひて心ようううべなはせいよ／＼明後日の晝つ方よりあやしき處には侍れどおのが別業にて開くことゝ定めぬ會友も十五六人バかりなればいと嬉しきまどゐとなん思ひたまふる就きては姉君にもあしわけ小舟のさわさけを給ひて必ずつらなり給ひてよ萬は對面のをりにと筆とめ侍りぬ

なほ兼題は「女子の務」にて用紙は半紙にてよろし當座は探題にて何れも大人の添削を乞ふ事と定め侍りぬまた其むしろにて大人の國文に就ての御物語もあるよしなればこの旨かきそへ侍るになんあなかしこ

岡　佐波子

秋もやゝふけ行くほどにみるべきものは紅葉ばかりと成り侍りぬ姉上にはいかに過ぐさせ給ふらん此ほどは夜もいたう永くなり寒さはいまださまで身にもしみ侍らねバ夜學にはこよなうよろしと思ひ侍るに幸ひ明日は日曜日にも當りはべれば二三の友垣打集ひ文の會を催し互に智識をみがゝバやと思ひ侍る同じ心にましまさば午后五時頃より御出席給はれかし又ゆふげはいさゝかなるもの調へまゐらするなればあはれみ心おきなくのぞませ給へとこひまつるになんあなかしこ

加藤たね子

このごろは御もとには如何におはしますらん夜も

いとながうなりて古の人の書きおかれにしふみどもも見んにはいとも畏きをりになり侍ればおのれひとりにてはわきがたきふしなどは何處にもあれ心あひたる友どちらうちつどひて互に讀みもしたゝしもせんは如何にとくれがしのきみなどの給はせければさらばいぶせう思ひ給ふらめどわらはのやにて爲侍らんなどはなしおきしことの今夜よりいよよ始めんことゝなり侍れどみなむね〳〵しからぬかぎりにしはべれどいかでこの道にかどたてる御方もがなとひたおもひにおもひ侍るになむいかであはれと御おぼしめし給ひてわらはらの不敏を御みちびき給ひてむや何はさて七時頃より御出てさせ給ひてよかしとひたぶるにねがひまつるになむくはしくは對面のときにきこえ侍りなんあなかしこ

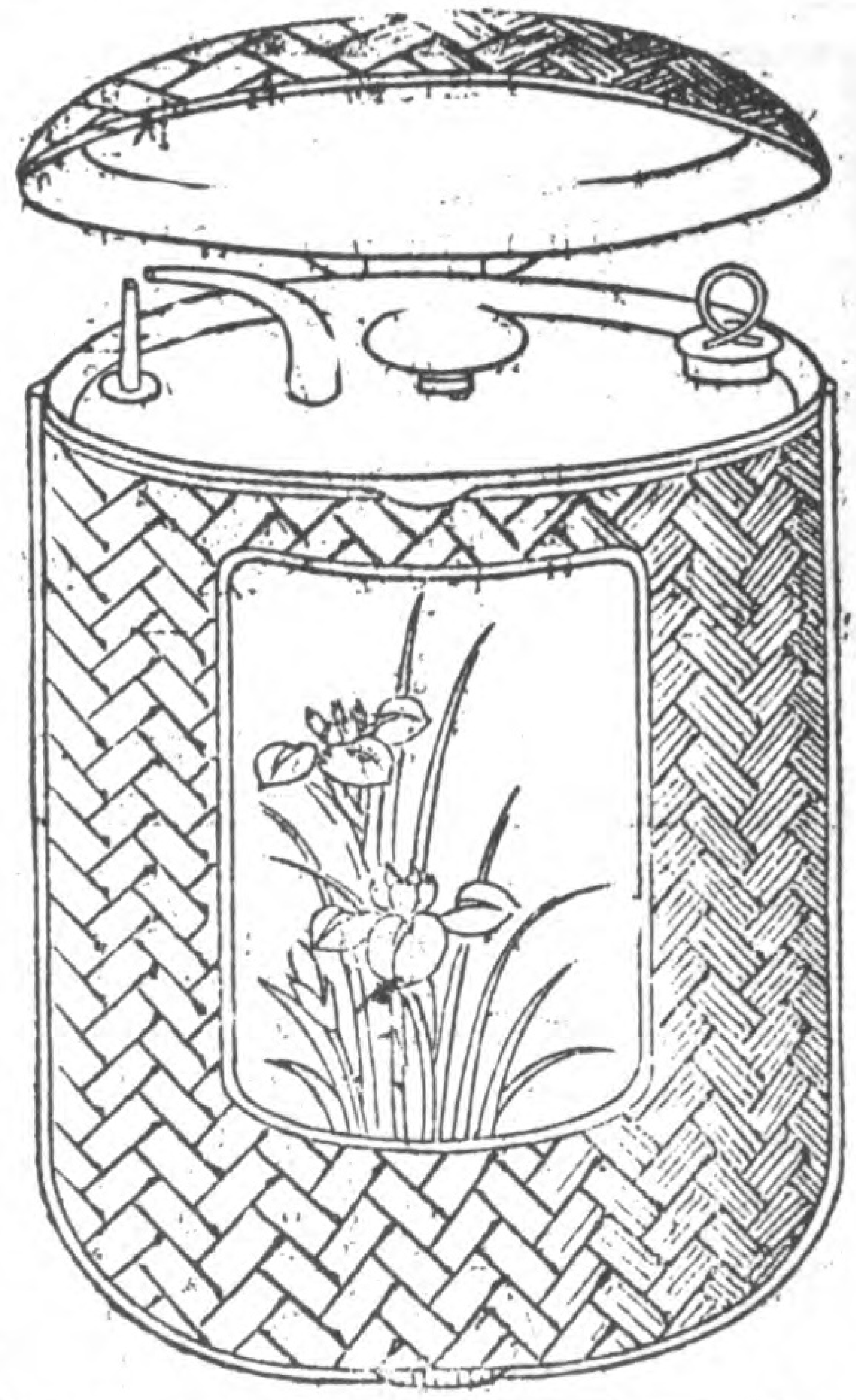
鎌倉右大臣

世のなかは
　つねにもがもな
　　なぎさこぐ
あまのを舟の
　つなで
　　かなしも

今般弊店に於て**専賣特許**を出願中なる**懐中香水吹**器具の儀は弊店が多年實地製作に從事し幾多の經驗と工夫とを凝せしに今般漸く其整功を見るに到れり

此器具は最も輕便調法なる新奇發明品なれば装飾用は勿論紳士貴婦人方は衛生上御携帯品として片時も欠く可らざる必要品なれば何卒御試用の上如何に實用に適するかを御證明被成下度

近時種々の新發明新工夫の品物尠とせず然れども弊店發明の懐中香水吹の如き定價廉にして啻に香水に止まらず散布用一切に適當なるは他に此類あるを見ず之れ實に弊店獨得の發明なり今般賣擴めの爲め多年御引立を蒙りたる御花主樣へ御禮として實價にて發賣仕候間御試用の上は御朋友樣方へ御吹聽の程奉懇願候



定價

水量四十グラム入

眞鍮製	金九十五錢
洋銀製	金一圓十錢

其他金銀赤銅四分一等御好次第調進仕候

尚又弊店調進の袋物、紙入、煙草入、煙管筒、煙管、指環、帶留、その外貴金屬寶玉珍石象嵌等の品々總て貴顯紳士令孃令閨方の御携帯美術装飾品は猶一層職工を勵まし其製作と彫刻を吟味致し調進仕候其品柄は堅牢優美にして坊間尋常の品とは一見雲泥の差あるは各御花主樣の疾に知らるゝ處とす且つ弊店の店則として懸直又は巧言等は不申上精々相働き正價を以て御調進申上萬事信用專一に營業仕候に付多少を問はず御用被仰付度此段併て奉願上候

袋物及貴金屬裝飾品商

電話架設中

丸屋商店

東京市京橋區銀坐三丁目十一番地

内務省衛生試驗所無害成績書下附　馬島直發明

登録商標

流行　歌舞伎おしろい

粉白梅（紙包三錢　紙筒六錢）
ねり白妙（美六錢　器十五錢　入五十錢）　十錢　卅錢　一圓
水白妙壜詰十錢廿錢外に殿方用もあり（肉色）

試驗報告

東京日本橋區小網町三丁目一番地
依頼人　馬嶋直

第二百七十三號
歌舞伎白粉　一種

右衛生上害否鑑定
右試驗の爲め製方書を添へ當所へ差出たる品は芳香を有する白色の粉末なり之に就て試驗を施行するに鉛等の有害物を撿出せず依て本品を化粧料として皮膚に塗敷するも衛生上無害なりとす
明治廿六年九月十五日
東京衛生試驗所
所長醫學博士　中濱東一郎　㊞
試驗主任　山本正巳　㊞

從來の白粉は芳香を有し乘も能く製しあるも素鉛粉を原基とせし故其毒は自然我體の膚理より脂肪中に含める酸類に溶解け益深く吸取れ白粉燒より何時となく其鉛毒の爲め身體衰弱し終には危篤の腦症を發し鉛毒の爲非命に斃るゝ者多き事は明瞭なり故に目下衛生上の一問題なるは何人も知る所なり弊堂數年來深く心を此改良にせよせよ學理と實際とに照して特に日本藥局法規定に係る藥品のみにて一も鉛粉を用ひず始て前古無比の白粉を發明し既に上に掲る如き證明書を賜り積年の苦心爰に良結果を得始て世上に廣賣するもの故御使用の御方は羅毒の憂なきは勿論實に無害無毒にして他品に優る特功あることは天折弊堂の誓て之を保證するのみならず博士の賞賛、貴顯の禮狀古代の沿革、俳優の死亡統計、化粧法、等皆包紙に詳記しあれば陸續御購求ありて美貌となり天壽をも全ふせられん事を

發明製造本舗　東京日本橋區小網町鎧橋際　博濟堂　馬島直
發賣本舗　同京橋區銀座一　つやふきん本舗　佐々木玄兵衛
電話四百七十二番

女鑑第七十四號目次

(明治二十四年八月八日內務省許可)
(明治廿五年三月十二日遞信省認可)

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月貳回發行　五日　廿日

定價壹册金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿七年十一月廿九日印刷
同　年同　月三十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)